

淨土

十二月號

法然上人鑽仰會發行

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)
昭和十一年一月一日發行

第二卷 第十二號

法然上人法語抄

藤井實應編
菊半裁版 一四四頁
クロース裝函入
定價 卅四錢
送料共

信仰の珠玉！ 浩翰なる上人遺文中より、現代生活に最も適切なるものを選んだ句々金玉の聖句！
現代日本人の聖典！

手頃なポケット型、装訂も確りしたものですから、仕事の合間、電車、自動車の中で手軽に取出して讀める。心靜かなる時、悩める時、隨時隨所に讀めて心の糧となり生活の指針となる。

敬虔な編者が一字一拜の誠を捧げ、嚴密な校訂を経てなつたもの。配列にも、編輯にも新機軸を開き、活字も九ポイント總ふり假名付であるから誰にも讀める！

勤め人も商人も労働者も、そのポケットに懷中に必ず一本を蓄へて信仰の眞髓に接して正しい生活の確立に資して下さい。

再 版 出 來 !!

◇ 會 仰 鑽 人 上 然 法 所 行 發 ◇

刊 日



購讀料(送料共)

一ヶ月 六十五錢

一ヶ年 七 圓

色特の紙本

佛敎・神道・基督教等各宗教の時事
佛敎學・印度學・宗教學等各學界の動向
佛青運動・教化運動・社會事業等の狀勢
學者・思想家・布敎家等の論說・隨筆・講演

これだけ知りたい人は本紙を讀め

り誇の紙本

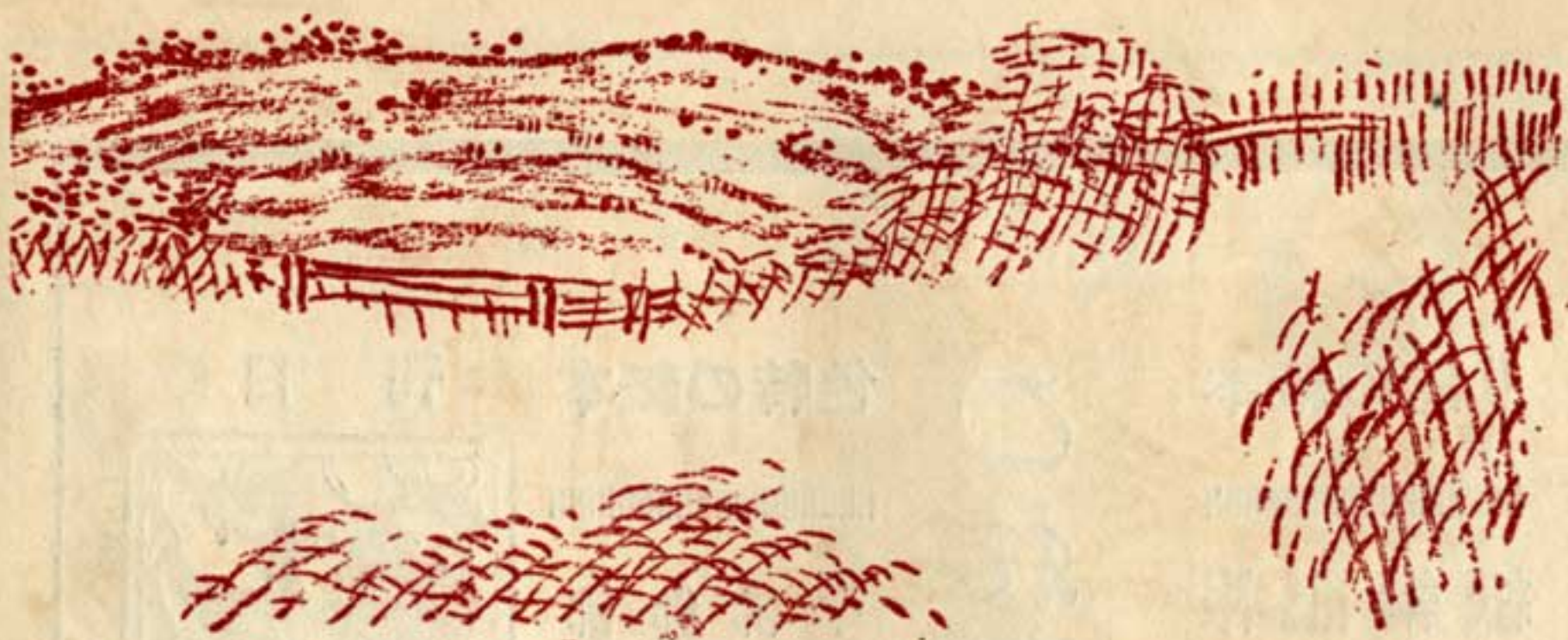
報 道 の 迅 速
記 事 の 公 正
編 輯 の 清 新
紙 代 の 低 廉

東京市京橋區銀座西五丁目

教 學 新 聞 社

京都支局

振替東京一三三八二三番
電話銀座(57)四四一三番
京都市下京區新町通リ花屋町下ル
電話下四一七七番



◇ 浄土 第十二卷 十二月號 目次 ◇

・表紙……………井上正春

・目次カッタ……………鈴木金平

說苑 葦間の月影……………眞野正順(二)

隨想 念佛・念佛者・往生……………佐藤春夫(一〇)

祐天上人 求道秘話 血染の寶劔……………瀧野一郎(三)

日本人の信念 桃太郎物語に學ぶ……………稻垣眞我(一六)

愚癡にかへる……………藤秀璚(三)

隨筆隨想 聲の精進……………生田花世(四)

平家物語 富士川……………畠四郎(六)

信仰 仰相談……………中村辨康(四)



信仰 夫と子等を失つた妻の苦闘……………窪川旭丈(三)

名將 毛利元就公の信仰……………三谷忍暉(六)

秘話 念佛信仰の店を見る……………本誌記者(五)

童話 ヒガミを捨て、明るく生きる……………菊地謙雄(五)

歌 壇……………與謝野晶子選(三)

俳 壇……………太田耳動子選(三)

淨土 訪問 犬猫にも淨土の悦び……………本誌記者(三)

如來の國……………上中甲堂(九)

小説 惡人また濟はる……………飯島晃(六)

講話 拜む……………藤井實應(六)

續 仰運動ニュース……………(七)

編輯 後記……………(七)

浄土 十一月特輯號

念佛 ★ 本 讀

（錢一 料送） 錢十二部一

【主要目次】

一二八頁 五號總ルビ付

▽念佛の意義
▽生 死 佛 本 信 与 行 願
▽念佛の集ひ
▽社會生活
▽女性生活
▽家庭生活

推尾 辨匡
中村 辨康
佐藤 賢順
大野 法道
眞野 正順
石井 教道
笹本 戒澤
島野 禎祥
江藤 澈英
佐藤 春夫

◆首を揃えて讀め

増上寺 大島徹水僧正

私は毎月の『浄土』を丹念に讀む。念佛讀本といふからには、もすこしむづかしく書いてあるだらうと思つたが、なか／＼うまいもので實によく出来てゐる。たゞ、いつもの『浄土』と違つて組み方に變化がなく、寫眞や繪が少いため、ちよつと見た時、むづかしいやうな印象を與えるのは惜しいことだつた。『浄土』は一家の者が首を揃えて讀めるといふ點、全く他の眞似の出来ないところであると思つてゐるが、特に今回の『念佛讀本』は浄土教の信仰を、平易に然も順序正しく説いてあつて、入信教科書として勝れたものである。

◆時代最高の指導書

浄土宗執綱 野上運外僧正

今や時代は非常時一色に塗り

つぶされて、人心頗に混迷しその行く處を知らない。實際、今日の我が國に於て最も必要なものは國民の精神力であつて、磐石不動の大決心はこれを正しき宗教の信仰によつて鍛鍊するの外はない。就中、法然上人の念佛による信仰は、いつでも、どこでも、たれにでも最も易く修得しうる唯一のものとして現代人最適の宗教である。

この時『浄土』十一月號が『念佛讀本號』を特輯し、平易簡明にその要旨を説いて入信の手引きとされたことは、寔に有意義な企であり、時代最高の指導書として必ずや現代人の生活を益するところ大なるものあることを疑はぬものである。

◆科學への肉迫

歌人 岡本かの子女史

この『念佛讀本』は月々出る一冊の雑誌として、單に讀み去るべきものではない。かりそめ

ならぬ冊子である。

殊に卷頭、中村辨康氏の「生」は尊き一文である。この種の文にあり勝ちな觀念的な處から抜け、天地間の生命的なるもの、眞髓にまで論及され、加へて科學の世界にまで肉迫してゐられる。他に名文益章多々。

編輯眞野氏の頭の好さも歴然として、近來の好冊子である。

◆昭和の選擇集

福島 河野大徹氏

御苦心の編纂になる『念佛讀本』拜見。まさにこれ昭和の選擇集なり。

◆更に會員倍加！

朝鮮 末光進蔡

特輯『念佛讀本』は内容誠に充實、一般讀者會員に喜ばれる事と存じてゐます。この讀本を中心に座談會、輪讀會を催し、更に會員の倍加運動を致し度く存じてゐます。とにかく本月の特輯は感謝に耐えません。

淨土

十二月號

もし智慧ちゑをもて生死しやうじを離はなるべくば、
源空げんくうなんぞ聖道門しやうだうもんをすてて、この
淨土門じやうどもんにおもむくべきまさに知る
べし、聖道門しやうだうもんの修行しやうぎやうは、智慧ちゑをき
はめて生死しやうじをはなれ、淨土門じやうどもんの修
行しやうぎやうは、愚痴ぐちにかへりて、極樂ごくらくにむ
まる。(法然上人法語抄・十六)





葦^{あし}間^まの月^{つき}影^{かげ}

眞野 正順

(一)

このごろ、晩秋の薄い日さしに、うつすりと庭の上を流れる白い水蒸氣を、この現身の眼にうすら冷たく覺えながら、私は、書齋の机の上に一卷の歌集をひらいてゐた。

うき草の生ふる渚に月かけの

ありとは こゝに 誰れか知るらむ。

これは、あの越の良寛の歌である。

その頃、すでに老齡に達してゐた良寛和尚は、越後國上山の奥深くに、小さな粗末な庵を結んでひとり棲んでゐた。そうして時たま山を下り、食を乞ふて歸るさ、野畑の道に、村の童男童女たちと無心に遊び笑みつゝ、その老ひても消えぬ天真の童心を流露したのであるが、また夕日色づくと共に

に、獨り山路をさしてとぼくと歸つてゆくのを常とした。

おそらく、もう夕暮の途次のことであらう。

山蔭の窪地に、少しばかりの水がたまつて、葦茅なぞが生ひてゐるところがある。さら／＼と鳴る枯葉の音に氣づいて、足許を見やると、ゆくりなくも、生ひ茂る葦の間、きら／＼と輝きながら、天上の月の影がうごいてゐる。

思はず足をとめて、ぢつと見入ると、その枯れ溜つた葦の間のころ、わずかばかりの水の面は、いまは冷たく銀のごとく輝き、煌々として天上に澄みに澄む月影をさながらにうつして、そのまゝ寂然として静まりかへつてゐる。

この山道の夜半に、いまは人一人過ぐるものとはなない。時たま暗の中に、葦の穂をゆるがしてあるかなしかの風がまた暗のなかに消えてゆくばかり、この哀れに見捨てられたやうな乏しい水溜は、静かに見れば思ひもかけず、今は、天上の麗はしい光をたへえ、この小さな水の面に、かの大空の壯麗なる世界は、さながら、残すところもなく込められ、その中は廣く遠く、ひろ／＼と果てしなく澄んでひろがつてゐるのである。

あはれなる野路の水溜よ。汝の淋しきすがたは、また我に似てゐる。人眼にふれず國上山の奥にちいさな草の庵を結んで、はかなく世を過す我れの心と汝とは、奇しくもまた似たるかな。その

姿は、世の人の眼にもかゝらず幽かではあるが、こゝに、かの天上の月影は、おなじく冴々とやどつてゐるのであつて、こゝに眼を留むる人あらば、また限りなき大空の世界をその内に見出すであらう。

思へば、それは、たゞ汝れと我とばかり然うなのではない。おしなべて世の苦難になやむ貧しき人々の胸の底にも、また、この限もなき天上の光は秘めてたゞえられてゐるを知らねばならぬ。

かう思ひながら、茫然と良寛和尚は、その老ひたる童顔を白く月影にさらしつゝいつまでも、立ちつくしてゐたのであらう。

x

x

x

良寛和尚から、すでに六百年も溯るのであるが、法然上人の御法語の中にも、かういふ言葉が傳えられてゐる。

『たとへば、葦のしげき池に、十五夜の月の宿りたるは、よそには月やどりたりとも見えねど、よく／＼立ちより見れば、葦間をわけて宿るなる。妄念の葦はしげれども、三心の月はやどるなる』
(法語抄 一〇五)

御弟子乗願のことばに依ると、故上人は、この譬喩を好まれて御法話の中にも、くりかへし用ひられたと傳えられる。おなじく上人もまた、かゝる葦間の月影を眺めて、しみ／＼と深く心に打

たれ澄わたることがあつたに相違ない。

(二)

晝間はすがれた葦の葉に埋もれて、見るかげもない路邊の、
も、夕ざりくれば、おのづから、そこに清らかな月影を宿してゐる
ことが露はれてくるやうに、人の心もまたそうである。その外
に現はれる姿によつて、必ずしも、その人の内面の光を計るこ
はできない。

私は、よく、子供の生長などを見ながら感じるのであるが、自
分の子になつて見ると、子供のこの頃の舉動などには随分氣にか
ゝるやうな不快なことが多く現はれてくる。そつといふ傾向のだん
／＼生いたつてゆく將來など考へてゐると、何とか早く、そんな
性質は揉み消してしまへないものかと苛つてくる。そして色々
叱言を言つたり手段を講じたりして見るけれども、それが却つて
悪い結果を招くやうで、妙にひねくれたりしてくる。そんな事
いろ／＼してゐると、何かのはずみに、一寸した局面をきつかけ
に、これはどうしたものか、思ひもかけぬ良い性質が、急に伸々
とあらはれて来て、その優しい内質に却つてこちらが打たれてし
まふ事がある。

こんな時の、ほつとした嬉しさの中に、つく／＼思ふことは、

目前の舉動だけでは、その兒の全體は決して極めつけてしまふこ
とは出来ないといふことである。子供なその生長は、ちやうど鞠
が、ころ／＼と轉がつてゆくやうに、表を出し、裏を出ししながら
絶えず變化してゆくものであるから、決して、いま出てゐる性質
だけでは、その持つて生れた性質の全部を見ることはできない。
それには、どうしても「永い眼」が必要だ。ながく辛棒づよく、
ちつと、その生い行く先までも凝視して待つてゐる深い愛の眼が必
要だ。そつといふものを用意してゐてやるのでなければ、今しきり
に變化してゐる子供は窮屈でたまらない。

よく世間で云はれる、繼しい親子の間に起りがちな喰違など
も、一つはこんな處に胚胎してゐる事がないだらうか。先妻の子
を受取つた新しい母親にして見れば、やはり優しく温かく、この
哀れた運命の子を育て、やりたく、それがまた、自分に課せられ
た神聖な務だと、眞剣になつて思つてゐることであらう。しか
し、だん／＼育て、ゆく間には、やはりたいの無條件な優しさだ
けでは、却つて、その兒の將來のために悪い。時には、相當の制
御を加えて行かなければならぬことが分つてくる。そつと思へば、
それだけ眞剣に子供の性質や舉動などを注意深く凝視する。しか
し、かうしてゐる間に、いつか、子供は常に鞠のごとく、ころ／＼
りながら變化するものであることを忘れてしまひ、遂いたゞ目前

に現はれる性質舉動だけで、その全部をきめてしまひ、その對策を立てるやうになつてくる。

だが、子供がいま現はしてゐる舉動は、その子の持つて生れた性質の全部ではない。その事は、自分が子供の時にかへつて思ひ出して見ればよく分ることだが、子供は、絶えず表を出したり、裏を出したりしながら生長してゆくものだ。ところが、心苛つた親になると、たゞ目前の舉止だけで、その兒をきめる。ちやうど、もうすつかり生長して動かぬ性格を完成した大人にでも對してゐるかの如き心をもつて子供を見てしまふ。それ故、子供になつて見れば、自分の或るとき、爲した行動によつて、何時までも自分が見られて窮屈でたまらない。今はそんな氣がしないことでも、何時までもこたわつてゐられるので、いつか心がうとくしく離れた垣の間に立つてゐるやうな氣になつてくる。

そんな事で、ずるぶん眞剣に、かつ強い愛情を用意して子供に對してゐる母親でありながら、その豫期とは反對の結果を、その子との間に生じてしまふ事があるやうである。

子供を見る眼は、どうしても、永い眼でなければならぬ。やはり、この子の何處かには純朗な美しさが、かならず秘められてゐるといふ事を見ぬき、ちつと待つ「愛の確信」がなければならぬ。

愛とは、その人のどこかに秘められたる「良さ」をいつまでも

確信してうごかぬ心である。

しかし、その「良さ」は、たゞその人の外面より見るならば、ほとんどその片鱗をすら認めがたい事があるだらう。それは、たとへば、あの路邊の渚の野草に蔽はれた姿に似てゐる。佗しい枯葉に蔽はれて、道を過ぐる人の顧みることもない、その草の間に、天上の月影は秘かに留められてゐるやうに、人をその内心の奥にたづねるならば、かならず、そこには清らかな天眞の光は留められてゐるのである。それを見るものこそまことによく、人を見る眼をもつ者といふことが出来るであらう。

(三)

この事は、たゞに兒童の上について必要なことであるだけでない。ひるがへつて考へれば、この人生に、人と人と共に生きてゆくための大切な結び目は、實はこの事のなかに横はつてゐる。

おほくの人と人とを、互に堅く結びつけて、家庭や社會をこのやうに結んでおる力は一體何であらうか。その力として、人は法律や風教の力を數え上げるであらう。しかし、このやうな外部的な頑くななものによつてのみ、この人生社會はほんとうに結びつけられてゐるのであらうか。

私は、法律や風教が、この社會を結ぶ大切な力をなすものであ

る事は充分認めてゐるつもりである。そうして、この現代世相の頹廢をしきりと憂いて、これらのものを繰返し、主張し強説してゐる所謂社會風教家の心中もまた充分理解し得ると思つてゐるものである。であるが——少し立入った事ではあるが——かゝる熱心なる社會風教家のそれ／＼の小さな家庭に觸れて見ると、そのすべてとは云はないまでも、時に屢々、思ひもかけずに親と子と妻と夫と冷たく相離れてゐるを見て驚くものである。

廣く世のために憂ひてやまぬ夫に、無理解なる妻と、心背くところの子女とが添ふことは、むしろ人生に見出される痛ましい運命の悲劇の一ではあらう。然し、それにしても、その數があまりにも多いことは、考へねばならぬ社會の事實ではないか。頑なな風教理論によつてだけでは、この人生は決して、まことには結びつけられてゐないのである。

それにひきかへて、また、この社會の中には、ずいぶん風教上からはいかゞはしい生活を營んでゐる者の群がある。そこでは、社會道德などはなげ捨てられ、法律さへもしば／＼犯されるやうな事が續き、良家の子女の平和な眼から見れば、暴々しき獸の群の蠢くを見るかのごとく感ぜられる社會ではあるが、親しく立入つて、その社會の内面に入つて見れば、その荒々しい風貌舉止の底に意外にも溫い人情が優しく流れ、他には見られぬ堅い信頼で

互に寄り合ひ、奇しき秩序を整然と營んでゐるのが見出される。これは一體何を意味してゐるのであらうか。

某日、私は友人と新宿に新國驛の「拘摸の家」を見た。場面はとある場末の長屋であるが、その貧しい人達は、そこに住んでゐる拘摸庄吉の商賣を知つてゐながら、誰もあたりまへの事のやうに介意しない。むしろ夫婦の氣質にみんな好意を寄せてゐる。

庄吉は、ある日、身なりのよくない子供連れの男の懷中から拘つたのであるが、やがて、思ひもかけず、その金は其人達をせつた彼は、すでに手をつけた其金の不足を補ふために、家財道具から女房の身のまわりまで洗ひざらひ賣つてしまひ、誂えた鰻飯まで折詰にして、飛ぶやうに上野驛に馳けつけてゆく。

ところが、その拘られた主に返してゐる場面を目ざとく見つけた新聞記者は、慈善家とかん違して庄吉を追ひまはすので、庄吉は警察の手がまわつたと早合點して、長屋の人達に別れをおしみながら、夫婦して夜逃げをしてしまふ。

すこし喜劇じみた、微笑を誘ふものではあるが、その顔つきの凄いのひきかへて心のひどく清らかな主人公や、その氣質に

一も二もなく信じ切つてゐる其妻、二人の心の優しさにひかれてゐる長屋の人達。これらが醸しだす、特有の清らかな情景には、見てゐる觀衆の胸の底に、何がなし迫つてくるところの強い「眞實」がこもつてゐた。

掬摸の惡は惡であるけれども、こゝではそれが、どこかに浮き上つてしまつて、その裏に秘められた優しい人情の流れだけが、きら／＼と澄み輝いてゐる。庄吉の「惡」は、むしろ同じ處に住む貧しいマツチ張や、聲色遣ひ達と同じやうに、それ／＼が肩に擔ふ生活苦をしのぐ道としてだけにしか感ぜられてゐない。その職業の惡も、性癖のゆがみも、はたまた醜惡なる風貌も、かの人達にとつては、むしろ、それ／＼が仕方なく背負つて來たこの世界の「運命」でしかない。その重くかつ醜い「運命の荷」の蔭から互に掌を伸べあつて、ひしと握りしめてゐる。それが彼等の世界なのである。

華間にうつる清き月影を見入つてゐれば、其處に立つ黒く亂れた華の姿は、いつか眼から消え去つて、たゞ煌々たる光の世界のみ深く遠く見えるだけであらう。その如く、彼等の醜き風貌と行爲も、その蔭に秘かにたゞえられる美しい光を互に認め互に見入るとき、おのづから、消え去つて、純なる人情の諧和がこゝに露はれてくるのである。すなはち、彼等は、互の裡なる月影を、互

ひに見入り見合ふことによつて、こゝに奇しくも溫かい信賴の世界を堅く形成してゐるのである。

現はれる外形のみによつて、其の人を定めることは不可能である。この自らでさへ、この轉變絶え間のない一生の行路に、何時か、その道を蹉跌することなきを保することが出來やうか。すでに誤つてその道を踏み外し、世の冷たい白眼をその背に浴びて、我がつたなき運命を泣く者の心にさしてくる暖かい光はどこから來るであらうか。それは、この我が外形を見る者の中にはない。この拙なき我身の内面にひそめられたる月影を見、かつ信じてくれる者だけにしかない。

さればこそ、刑にあへる盗人をまことに悔悟せしむるものは、その内心を信じて動かぬ優しき妻の心根であつた。失意に墮ちたる友人をして再び奮起せしむるものは、その眞實の信友であつた。自棄して凶暴におちいれる子を再び泣かしむるものは、また我子を信じてやまぬ老母の膝ではなかつたか。まこと、あらゆる轉變を越えて、人を人とし、眞に生かし、かつ結ぶものは常にかくの如くかくれたる内面の月影を見、かつ信ずる心の外にない。

この社會にあつて、その人の胸が、底まで冷え凝固つて、光の片影をさへ、そこに留めぬ粗鐵のごとき人が、もし在りとするならば、其人は遂に救ひ無き人であらう。然しながら、かゝる人は實には存しない。かくては、生きて行けないからである。

人の心の奥底をさぐり來れば、かならず、そこに氣高き光が幽けく柔かく瞬いてゐる。しかしこの事を、人は我身に於てはたやすく領くのであるが、他人を見る眼に於ては、しばしばこれを曇らし勝ちである。日々の交渉葛藤のまに／＼一時の行掛りに墮いて、遂にその人の本然を見失ふことは餘りにも我等に多い。そうして故もなき怨恨や憎惡をいたずらに我等の間に捲き起してしまふのである。

まこと人を見る眼は、その外形によつて裁くところの「智」でなくて、見えざるを見るところの「信」でなければならぬ。人と人との結合が「信頼」に根ざさねばならなかつたやうに、人々まことに見るものはあらゆる外形の行掛りを越えて、直ちにその人の内面の純光に直參するところの「信の眼」でなければならぬ。眞實の生活の基礎は信である。

かくて、我等はいつか宗教の門にと辿りついてゐるのである。宗教とは、あらゆる外形をはぬのけて、かゝる月影の中に、こ

の身を投げ入れ、輝くその流れに全身をひたらせて行くことである。すなはち、光の中において、この人生を見るものである。

唐の善導和尚は、信仰者の生活規範を簡潔に言ひ放たれた。

「慈心もて相ひ向ひ。佛眼もて相ひ看る。」

佛の眼とは、やがて、この光において見ることである。すなはち、互の胸の奥底に湛えられたる限なき佛光を、互ひに見交しつゝ、睦み合つてゆく生活である。

宇内に満つる輝やく佛光を信受する者は、やがて世の諸々の人の奥にすでに深く照らされてゐるが、その光を影を見逃すことはないであらう。かゝる光の中より見れば、こゝに在る我等はそのそれ／＼の身を以てかの崇き天上の月影を藏むところの渚である。月影のいたらぬ里はなけれども

ながむる人の心にぞすむ。(法語抄二六〇)

内につゝむところの月影を、その人それ／＼の境遇と運命との姿の中に、さまざまに瞬き輝かしてゆく、それがこの人生の實相である。世は畢竟、人間それ／＼が互ひにその胸に分ら與へられたる清き光を中心として、さまざまの姿にその生活相を織りなしてゆく、限りなく、かつ壯麗なる一畫圖ではないか。

靜かに味へば、今更に、この一首にこもる意味のかぎりなき深さに打たれるのみである。

如來の國

上 中 甲 堂

見えざる力

明治天皇の御製に

目に見えぬ神の心にかよふこそ

人の心のまことなりけれ

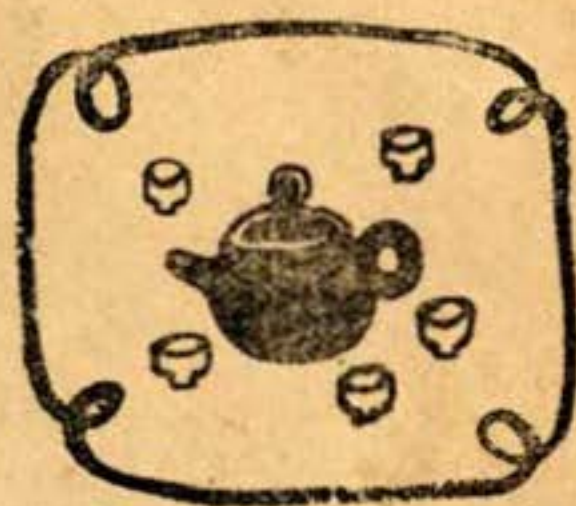
見えざる力を見出して生活するときに吾等の生活は一段と深まつて行くのであります、之を信仰の世界と申しませうか、茲に卑近な實例を以て申して見ませう、私の今着てゐる洋服は皆様が他の洋服屋よりお買ひになる洋服よりもやがて拾圓ばかり安いのであります、値段は安いが生地も裁縫も優りこそすれ決して劣つてはゐません、私の體にはピッタリ合つて着心地が非常に宜しい、私がこの洋服を着てゐる時は私の心

持は何となくさわやかで家に居れば家族の者とやわらぎ、外に出てもなごやかな心持で名僚に接する、畢竟これは此洋服屋がお客に喜んで頂きたいと云ふ願ひを以て良き品物を安く私に提供して呉れたのであつて此洋服に洋服屋のまごころとも云ふべき見えない力が仕込まれてゐるからであります、その力が私をしてほがらかな心持にならしめてゐるのであります、この力こそこの世の中を天國又は極樂の世界にする所謂神の力又は佛の力とも云ふべきものであります。

良き品を安く買ひたいと云ふのであります、賣手の成功は買手に満足と與へることでもありますから品物には必ず親切をそへて渡すこと、さすれば販路は自然と開拓されて行くのであります、商賣に最も必要なことは此見えない力が自分の商品に仕込まれてゐるかどうかを始終見ることであります

水すまし

濁つた水溜りに、何處からともなく一匹の鼓蟲が飛んで來た、忽ちぐるぐると水上に旋回運動を始めた、一時、二た時、波紋を描き乍ら此運動はつゞけられた、その内に、不思議にも水はおのづから澄んで來た、やがてはボーフラの棲家となるべきこの停水が、圖らずも一匹の鼓蟲によつて清澄にかへつたのである、絶えざる努力は恐ろしい、可憐な一小蟲の働きも遂には停水に流れを誘發して、濁水を腐敗から防いだのである。



念佛念佛者往生など

— つれづれ草から —

佐藤春夫

つれづれ草の第三十九段に

ある人が、法然上人に「念佛の時、眠氣がさして行の邪魔をするのは、どうしたらこの障害をさけられませうか」と申したところ「目のさめた折に念佛しなさい」と答へられた。非常に有難い。又「往生はきつと出来るものと思へばきつと出来るし、往生を疑はしいものと思ふと疑はしいものになる」と云はれた。これも亦有難い。又「疑ひながらも念佛すれば往生を遂げられる」とも云はれた。これもまた有難い。

とあるのは誰もよく知つてゐる段である。百二十四段には——

是法法師は淨土宗では何人にも恥ぢない學者であつたのに、學者ぶらないで、ただ、明暮念佛をして、平和安穩に世を過して居る様子は、理想的な境涯である。

と記してゐる。なほ、第二百二十二段には、

竹谷（山城醍醐にある）の乗願坊が東二條院へ参上した時「亡者の追善には何が一番功德が多いか」とおたづねがあつたのに對して「光明眞言 寶篋印陀羅尼（經の名）でございませう」とお答へしたのを弟子たちが「どうしてそんな風に申上げたのですか。念佛にまさるものはございませうと、どうして申し上げませぬでした」と云ふと「自分の宗旨ではあり、さう申し上げたかつたのではあるが、特に稱名を追善に修して大きな功德があると書いてある經文を見たことがないから、若し院が「それは何に書いてあるか」とお尋ねになつたら何とお答へしたのかと思つて、經文に根據があるので眞言陀羅尼を申上げた次第だ」と答へた。

といふのがある。この際、自宗を偏重せず、専ら權威に従つてゐる奥ゆかしい師の態度と、まだその境地にまで到つてゐない弟子たちの態度との對比がおもしろい。

なほつれづれ草には佛敎的な人生觀を述べてゐる箇所はあまりに多いから一々數へ上げてはゐられない。それは時代のせみではあるが、それもつれづれを方丈記と並べて日本の佛敎文學の双璧と呼ぶことには何人も不服はあるまい。それ等のお談義のなかでは百六十六段が一番結構なと思へる――

人間の平生してゐることを見ると恰も春の温い日に雪佛を造つて、そのために、金銀の珠玉の裝飾を用意し、それを本尊に安置しようと堂塔を建てんとするやうなものである。併し、そんな準備が出来上つてそれを安置することが出来よう筈があらうか。人間に生命があるやうに見えてゐる間も下から消えて行つてゐる様子は雪のやうなものなのに、それに氣づかないでいろいろな計畫や準備ばかり頗る多い。

祐天上人求道秘話



血染の寶劍

瀧野一郎

(一)

蜘蛛の糸のやうな雨がシト／＼と降つてゐた。
空も海も陸も暗灰一色に煙つて、堤防に打ち寄せる波の音も、
人の心臓を抉るやうに重苦しく聞えて来る。

『待たれい！ お待ちなされ。』

突然、壓し殺ろされさうな此の空氣を破つて、凜とした聲が響いた。と同時に、バタバタと駆け出したのは一人の僧であつた。

先刻から人一人通らないこの品川堤を、十三四の黒衣の小僧が、物思ひに耽りながら、濡れるにまかせて、さ迷つてゐたが、急に、身を躍らして海に飛びこまうとした。

『待たれいと云ふに。如何なる仔細かは存ぜねど、早まつた事を……』

この物語は學徳一世を風靡した近世の高僧祐天上人の血を吐く修業物語である。筆者は群馬縣館林の善導寺に傳へられる實説を、そのまゝ少しの潤色も施さず傳へた。心よく材料を提供して下された善導寺の貫主石井英亮僧正に厚く御禮を述べると共に、筆者の淺慮が眞意を誤り傳へはしなかつたかを憂ふる次第である。

息せききつて、轉ばんばかりに追ひすがつた僧は、背後からしつかり抱き止めた。

「アツ！ お、お離しを……。お願いです。」

「何を云はれるのじや。見れば年はもゆかず、それに出家剃髪のそなた、何あつてこんな輕擧な事をなさるのじや」

「輕擧な事、そうです。だが、恥しい事ながら、私には人間の資格がないのです。永らへても何の役にもたゝぬ者です。」

「えゝ？ 役に立たぬ、それは間違じや。どんな理由があらうとも、それは大間違じや。生れがたい人間に生を受けた事を有難く思はれぬのか。」

「有難く思へばこそ、動物のやうに生きてゐるのが勿體ないので。不甲斐ないこの身を殺して、お詫びしたいのです。」

「お詫びどころか、大罪じや。」

大罪と聞いて小僧はギクリとして、不安な感情に襲はれた。抱き止めた僧は靜かに言葉を續けた。

「自らの命を自ら斷つ、佛教ではこれ程大きな罪はないのじや。ましてそなたは佛道に精進する僧ではないか。待たれい。」

小僧はもう耐へられなくなつた。こみ上げて来るやるせなさをどうする事も出来ず、ワアツと泣き出した。

「よし／＼判つた。とにかく拙僧が暫らくの間そなたの命を預かる。拙僧は寮の納所善長じや。そなたは？」

「祐、祐天」

「祐天とな、こゝでは仔細も聞けぬ。拙僧の宅でユツクリ聞くとしよう。」

善長は抱くやうにして祐天をひきたてた。もう四邊は眞闇になつてしまつた。だが雨は止みもせず、シトシトと二人に降り注ぐ。

やがて、シツカリ抱き合つた二人は靜かに歩き始めた。

(二)

其夜、祐天が血涙をふるつて善長に物語つた悲話……

祐天は奥州岩城郡上新田村の百姓新妻小左衛門の一人息子として生れた。幼名を三之助と云つて、父母の温かい慈愛に包まれて、スクスクと育つた。だが、父母は健やかに生長するにつけて、三之助の將來をいろ／＼と心配した。その擧句、佛教に歸依深い夫婦は、一人出家すれば九族天に生ずと云ふから、一族の爲にも、本人の爲にもと思つて、出家にしようとした。

幸な事には、江戸の増上寺山内に居る隨譽休波と云ふ和尚が、三之助の伯父に當るので、その和尚を頼つて出家せしめた。慶安元年の秋の事で、三之助が十二歳であつた。

ところが、休波和尚は自分の手許では、肉親の氣兼ねもあつて、修業の障りともなるだらうと考へて、當時、有名な學者であつた袋谷權通和尚の許に入門させた。

法名も祐天と改められた。

間もなく師匠自らの手で、御經の傳授となつた。手ほどこきにと無量壽經の四誓偈を口傳へに教へられるのだが、どうしたのか祐天は、一字覺ゆれば、次の字を忘れ、後の句を誦すれば、前の句を失念すると云ふ調子で、一句も覺ゆる事が出来ない。師の檀通上人もほとほと困られたが、元來が學者であり、忍耐強い人であつたから、倦まずたゆまず、種々様々の方法で根氣よく教授せられた。祐天も亦一生懸命で、朝夕の傳授の時は勿論、僅かな暇も無駄にせず勵んだ。だが、こんな事が五六十日も繰り返へされたのに、一句も覺ゆる事が出来なかつた。

さすがの檀通上人も、これでは上達の望はないと諦めて、親許に歸さうかとさへ思はれたが、一人前の出家になるまでは勘當だ、と言ひ棄てゝ歸つて行つた親の事を考へると、歸す事も出来ず、先づ當分は様子を見ようと、そのまゝ雜役に使はれてゐた。

一方祐天は子供心にも、如何なる宿業の報か、これ程一生懸命に教はるのに、一字も覺えないとは情ない、と悲憤の涙に暮れてゐた。月日は遠慮なく經ち、同輩の學問はメキメキと上達するが、祐天の知識は少しも進まない。自分ながら鈍才がうらめしく、心のみいだつて、我身の腑甲斐なさが、しみ／＼と痛感された。

そして、自分の鈍才をあきらめて、擇んだのが死への旅であつた。

涙ながらに語る祐天の悶々の悲話を聞き終つた時、善長はホツトした。言々句々が針の如く胸を刺して、まともに祐天の顔も見られなかつた。

『それしきの事で、死を……』

と慰める積りで、思はず口走つたが、祐天の決死の形相を見て、ハタと口を閉ぢた。生きる事の尊さとか、死んだ思ひで勵めば何事も成就するとかの月並の慰めでは、祐天の決意を思ひかへさせる事は、到底出来ないと思つたからだ。

『でも御坊、物覚えの悪いのは、どうしてもなほりませぬ』

と云はれたら返す言葉があらうか。

『私の力ではどうする事も出来ない。』

と答へる外に言葉はない。

善長は困つてしまつた。折角、こゝまで救つたのに、これからどう云つて祐天の決心を思ひかへさせるか。ジーンツと祐天の顔に見入りながら、いろ／＼と考へてゐたが、

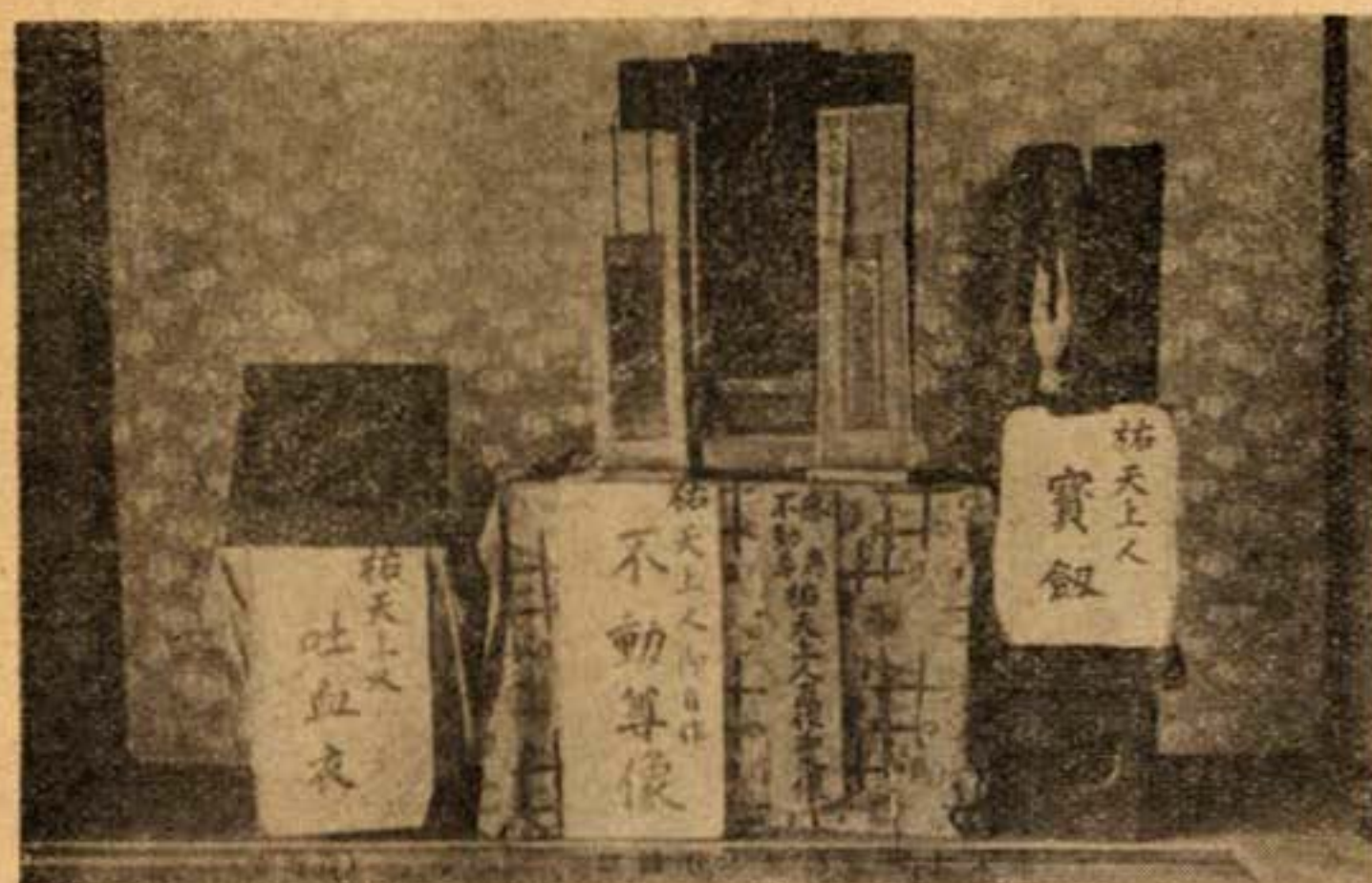
『アッー そうだ。』

とボンと膝を打つて、微笑をもらした。

『いゝ事がある。實はな、當山の開山上人には智慧をお授け下さると云ふ有難い御利益があるのじや。古來の名僧知識の中にも、これ

に祈請して御利益を蒙つた御方がたくさんあると傳へられてゐる程だから、そなたも死んだ思ひで祈念したら、必ず御利益を授かるに違ひない。」

善長はこれだけ云ふと、また、ジーンツと祐天を凝視めてゐた。



祐天のかたくなつた眞青な顔が、だん／＼ゆるみ始めて、生色を顯はして來た。口許に微かな笑さへ浮んで。善長もやつと心がのびやかになつて來た。

「御坊、是非とも參籠して、御利益にあづかりたいと存じます。」

祐天は其夜からはやる心を抑へて、靜かに開山堂に籠り、一心不亂に祈念し始めた。一七日は夢の

如くに過ぎ去つて、やがて、満願の夜が來た。

「満願だ。どうか御利益を。」

五體も散れ、心も飛べ、と身命を投げすてて夢中に祈請した。

開山堂は次第に凄慘な氣に充ちて、眞夜の中に沈んで行く。祐天の荒い呼吸の外は何一つ聞えない。

と突然、白髪の老僧が何處からともなく、祐天の前に現れた。ハツと驚愕の聲を洩らした祐天を、悠々見下して、

「汝前世の業因抽なくして、目あれども盲目同然の今生の果報を受けた。然るに本覺内に薰じてか、丹誠を抽んで、祈請する心根を愛で、汝に示すことあり。汝専ら不動尊を念すること三七日、斷食精進して祈請せば、所願満足せん。」

と云ふかと思へば、かき消すやうに立ち去つた。祐天は開山上人の御告げであると有難涙に咽び、夜明けを待ちかねて、師の檀通上人の許へ急ぎ戻つた。

(四)

喜び勇んで歸りはしたが、さて、何れの不動尊に祈請したものかと、思ひあぐんでゐた。丁度その折、檀通上人が台命によつて上州館林の善導寺に入寺せらるゝ事となつた。

善導寺は遠く奈良時代に行基大菩薩が草庵を結ばれたのに端を發し、後年、淨土宗の三祖記主禪師の嫡弟良曉上人が、念佛專修道場

の大伽藍を營まれて、その舊跡を再興された。寺號も終南山見生院善導寺と號したが、これより後、高僧碩德が法燈を繼ぎ、淨土宗の樞要な寺となつた。然るに、かの豊國の兵火はこの名寺をも焼きはらひ、昔の盛時は地をはらふ、と云ふ見るかげもなき荒廢寺となつてしまつた。

時に、御陽成天皇の御宇、當時の館林城主榊原康政公が、淨土宗の名僧幡隨意上人の高徳を慕ひ、上人の再興の念を察しられて、大伽藍を新建された。天正十九年五月から慶長五年に亘る十ヶ年の大工事で、輪奐の美、贅を極め、威風四邊を壓する見事な大伽藍が落成した。こえて、元和元年には貴い由緒により、家康公より關東十八檀林の一に選定された。

祐天も師の上人に風從して善導寺に來たが、來てみて驚いた。靈驗あらたかな行基菩薩御作の不動尊像が、この寺にあつたのだ。

『これこそ尋ねあぐんでゐた不動尊だ。』

祐天は我が願かなつたりと喜び、到着の翌日から、直ちに不退轉の大勇猛心を以て、三七日間の斷食の誓をたてて、

『南無歸命頂禮不動明王、我に智慧の眼を開かしめ給へ。』

の一念に、晝夜寝もやらず、舌端火を吐く祈願を始めた。

一七日經つた黄昏時、

見知らぬ僧が漂然と訪れて、

『斷食の誓をたてたとは云へ、一七日も經てば、重湯を飲んで氣力

を補ひ、そして更に斷食するのが掟である。私も勿論飲むが、そなたも飲んで飢を凌がれたらよからう。』

と云つて一の壺を祐天の前に置いた。祐天は見向きもせず、

『三七日の間は物一つ通すまいと誓願したのですから、御辭退致します。』

と答へるや、引續いて祈請をこらした。

祐天の決意は牢固たるものがあつた。然し、日が經つにつれて、肉體の衰弱は甚しかつた。ひどい衰弱の爲に倒れた事も再三であつた。

二七日目の薄暮の事、

一見、六十許りの老婆が來て、

『私は不動尊のお告げを奉じて來た者ですが、あなたはもう身も心も疲れきつてゐなさる。今日一日を過せば命が危い。今迄の念力によつて不動尊の利益は疑ひないから、命のあるうちに祈願を終へなされ。』

といとも懇に勧めた。

『御勧めは忝ないが、私の今度の立願は身命を惜しむ柔弱のものではない。三七日の參籠が終り、不動尊を拜する迄は、たとへ死んでも此處は動きませぬ。』

と應ずる氣色としてはなかつた。如何なる誘惑があらうとも、祐天の嚴のやうな信念をまげさせる事は出来なかつた。

遂に苦悶の三七日は経つてしまつた。骸骨の如く瘦せ細つた祐天は、肉體の苦痛もものは、烈々たる信念の火を燃やして、不動尊の現はれ給ふを待ちあぐんでゐた。

然し丑滿時が過ぎても、何の驗もない。

もう夜明けた。鶏がをちこちに啼き始めた。祐天は極度の衰弱に、思はず知らずまどろんだ。その夢幻の意識の中に、突然、心もくらむやうな光芒がサーツと流れこんだ。ハツと思つて祐天が目を開き、見上げると、身丈一丈もある不動尊が、煌々と輝く火焰を背負ひ、左右の御手には長短二振の利劍を握つて現はれ給ふた。祐天は餘りの威光にひれふしてしまつた。すると、その頭上に、

『我、汝が無二の丹誠、不拔の念力に感じて來現せり。汝宿業の故に無智魯鈍なりと雖も、茲に方便あり。この長短二振の劍の内、一を吞まばまのあたりに智を生ぜん。長きを吞むか、短きを吞むか』

朗々たる不動尊の聲が響きわたつた。

祐天は誓願のかなつた嬉しさの餘り、痔せ細つた身體もいとはず、『長い方を吞みませう。』

決然と答へ、口を大きく開いて、不動尊の前に進み寄つた。不動尊は長い利劍を振り上げて、呪文を唱へながら、祐天の口中にグーツト差しこまれた。祐天は苦しいと思つたが、そのまゝ息が絶えてしまつた。

程經て蘇つたが、總べてが夢のやうに思はれた。若しや夢であ

つたら、今迄の參籠も水の泡だ。不安な氣に沈みながら、四方を見渡した。

『アツ！ 利劍だ。』

彼の横には血にまみれた長劍が横はつてゐた。また、彼の衣には黒き血がベツトリとついてゐる。

『夢ではなかつたのだ。不動尊が智慧をお授けになつたのだ。有難い、有難い。……』

天にも昇る喜びで、ゐても立つてもゐられなかつた。

折柄本堂では朝の勤行が始まつた。耳を澄ませば、宛も元から知つた經文のやうに、一字一句忘れずに覚えられた。

かくして不動尊の利生を蒙つた祐天は、智慧の眼が急に開け、稀に見る鋭才を發揮するやうになつた。それに加へて、勉學大いに努めたから、博學英敏、當時比肩する人のない大學匠となつた。

後年、將軍より迎へられて、増上寺の大僧正に昇進せられたのは、何人も知る所である。(終)

x

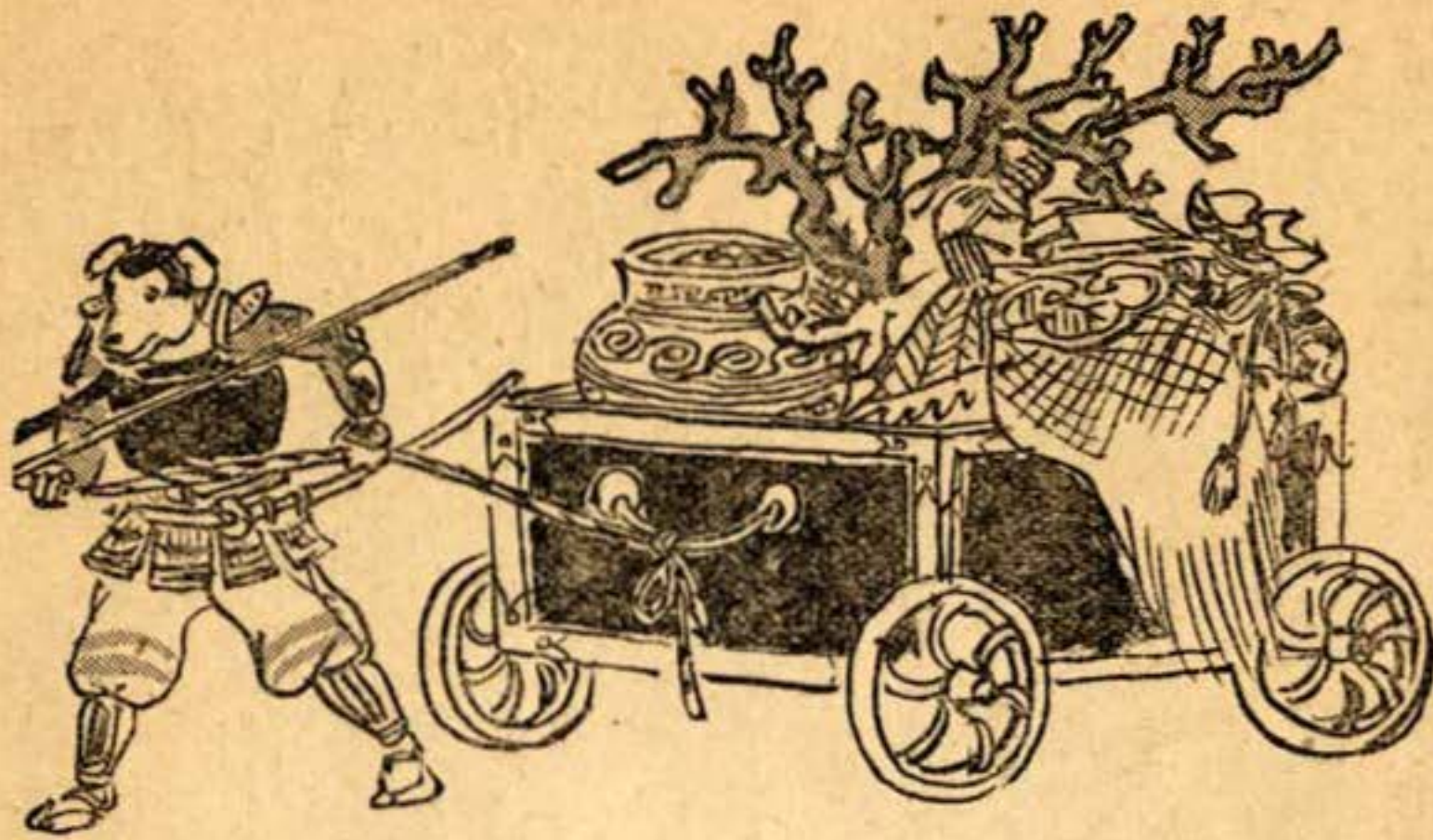
x

x

附記、當時の吐血の衣、授けられた寶劍は今日、善導寺に什寶として保存せられて、參拜者に深い感動を與へ、不動尊は顯成出世不動尊又は生不動尊と稱せられて、參拜者の渴仰の的となつてゐる。尙、祐天上人の後日譚、並びに不動尊の靈驗秘話に就ては幾多の材料があるが、後日に譲る事とする。(寫眞参照)

日本人の信念 桃太郎物語に學ぶ

稻垣眞我



人にして人を知らざる人多し
人のことをば學べん人々

日本人にして「桃太郎物語」を知らぬ人は
ありません。しかし明治二十年代に歸化人ラ
フカデイオ・ハーン小泉八雲によつて、日本
研究の材料として「心」「靈の日本」「骨董」「天
の河縁起」「神國日本」等の著書と並んで、日
本のお伽噺も英譯せられ、歐米の社交界に歡
迎せられ、「桃太郎」こそは世界民族の持つお
伽噺の中に「第一位」の折紙をつけられたと
いふことを知る人は少いかも知れません。
私の感激はこゝから始まる譯で、いま私は
幼い頃の農家の秋の夜、父は内職に汗し、母
は糸を紡ぎながら、幼いものに「むかし／＼
ある處に……」と話し出される姿をまのあ

たり思ひ浮べることによつて、たゞ美しい純
心に歸らされ、故郷を通して素直な祖國を見
るやうであります。

この肉の躍るやうな新しい感激のうちに、
その後の「桃太郎物語」の教養を私達の實生
活に當てはめて、立派に役立つものとしてみ
たい。そこには色々な指導と模範とがあふれ
てゐるし、一言にして云へば「日本人の信
念」の躍如たるものがあるのであります。

◆ 私達はもつと環境を整理し

深い悲哀を喜びを持たまほし

桃太郎物語は冒頭から面白い。むかし「あ
る處にお爺さんとお婆さんとがゐました」お
爺さんは山へ柴刈りにお婆さんは川へ洗濯
に」と始まる。こゝで悠久の日本、一人一役
の國民、祖先のなつかしい働きぶりを物語る
かと思へば、ある日「お婆さんが洗濯をして
ゐると川上から大きな桃が流れて來ました」
と云つて、物語に親しみを感ぜしめながら、
甘そうな桃をどうするであらうかと、話に日

【清水對岳坊畫】



の出の勢ひを添へながら、人生食欲に對する指導となり、如何にもこの家が「貧しけれども家庭圓滿」といふところを物語り出して行きます。

勿論、お婆さんは桃を一人では食ひません。お爺さんと二人で分けて食はうと家に持ち歸る。いよく切らうとすれば一人の男の子が可愛く生れたから、桃太郎と名づけたといふので、話の中心人物は新鮮な瑞兆のうちに伸び育つてゆくこととなり、前途の波瀾重疊を豫想させるのであります。

突込んで物語のねらひどころを求めるところだ。爺さん婆さんは老寄つても柴刈りやすすぎ洗濯を生業としてゐるのだから、誰れがどう想像しても富み榮えてゐるとは思へない。しかも貧しけれども夫婦圓滿、白髪まで共稼ぎの功あつて、小金もたまつたが、そゝろに人生の秋を思ふ時、子供が一人あつたらとかねて二人が相續人を捜してゐたところ、今日こそ、兩親は知れぬが丸々肥つた可愛い男兒を買つて養嗣子ときめたのである。それ

を「川上から流れてきた一つの大きな桃」に擬らへて、人情の自然と、日本の家の餘さを明かにしたものと思はれるのであります。

◇

求めて得らるべきは自らの眞實性

さて人生何ものか眞實なる

桃太郎の家庭教育は成功しました。貧しい中にも夫婦和合し、天地神明を拜みながら、心に旭日を抱いてよろこび働く間に躰けられたのである。起居も動作も、読み書き算盤も普通の教養終りを告げる頃、ある日桃太郎は「僕はこれから鬼が島へ鬼退治にゆきたい」と云ひ出した。これを聞いたお爺さんお婆さんは一度は驚きもしたが、その健康、正義、勇氣に感激して「日本一のきび團子」をもたせてやることになりました。

つまり一人前となつた桃太郎が人生出發の獨立宣言をやつたのである。兩親も分らず貧しい老夫婦に育て養はれた桃太郎は、氣もひがまず、信念ある日本人として、丁年に達するが早い、同胞一家兄弟の國を目ざし、先

づそれを邪魔する内外の「鬼征伐」を手はじめとして、己れはたとへ貧しくとも國の富むことを喜んで、無私奉公の精神に燃えつゝ、大和合の世界、大平和の生活に邁進せんとしたのであります。

老夫婦はこの雄々しい人生の門出を喜び祝ひながら、長い年月粒々辛苦した財産の全部を譲り渡すと共に、質素な相續の披露會をやつたといふ朗かな話が「早速日本一のきび團子をつくつてやりました」と物語られるものと思はれます。この美しい情景を、衣食の諸慾を恣にして自然の勞力を浪費し、自我驕慢の主張のために、喧燥の中を歩きまはつて、生存競争を激しくし、同胞相食むことまですく甚だしい現代人の心に見せたい。そして落ちついた、しんみりとした話し合ひや、勉強のし合ひや、力のつけ合ひの出来る深みある生活が味ひたいと念じます。

◇

すべての聖業は信念人を中心にして
一技一能協力の上に成らむ

「千萬人と雖もわれゆかむ」といふ桃太郎には、求めずして自然に聖業成就に必要な人物が寄り集つて来るのは、何たる痛快な事ではありませんか。たしかに桃太郎は、人も物も常に純化し、淨化し、進化し、天壤と共に窮りなきお國を信じて疑はぬ。われ取らず、奪はず、護り育つるのみ、兄弟姉妹同胞よと、日本一の大旗を押し立て、進軍すれば、日本一のきび團子「一つ下さいお伴致します」とつぎ／＼と出て来る「犬」「猿」「雉」といつたやうな、一技一能に秀でた人物を始め「その他大勢」の人達があつたのであります。

犬と猿の間柄でも、一度信念人に出遭へば忽ち融和して、職業を中心に全身全霊を投げ出して惜まぬとも見られるし、鳥獸のやうな人も正義の軍には立ちあがるとも云へやう。また一技一能あるものも、ないものも、たゞ自分より優れたものに接しては自分を高めた、い、毎朝起きると捧げ働きたい、發明工夫研究改良の核子を正しく養成してゆきたいと思ひ、それでゐてきび團子タッタ一つでよいと

いへば、職業戦線は直ぐにも吹き飛ばされ、完全に就職出来るとも考へられやうが、それはまだこの物語の入門で、本筋ではないのであります。

◇

コツはその人の持つ技術なり
やる人の熱心と辛棒から出る

そも／＼「犬」とは何か。東京の澁谷驛頭に生前から銅像を建てられたといふ「忠犬八公」を思ひ出して下さい。主人とその家のために、晝夜の別なく忠實に、その「眼」「鼻」「耳」「口」「身」「意」共に勤敏服業して、拜むが如くよろこび働いて一生を美しく捧げたではないか。犬は實に忠順と孝順の模範なのである。この犬のやうな人物が先づ桃太郎の協力者でありました。目下津々裏々犬の大流行である。少しは犬の賢しさに學んでもよからうか。

次の同伴者の「猿」は動物園を思ひ出させる。猿面冠者と云へば太閤様のアダ名として日吉丸、藤吉郎、秀吉の連續善闘の一生を思

ひ出す。それよりもあの滑稽、すばしこさ、眞似を思ふて吹き出さずにはゐられませんまい。人間は猿智恵、猿眞似などと云ふが、つくづく思へば、人間こそ大眞似師である。見よ、血道をあげて模倣に猿智慧に日も夜も足りない有様を。それでゐて碌な眞似もなし得ず、つまらぬ眞似の半途で一生を終るものが、如何に多いことか。猿公を決して笑ふことは出来まい。寧ろ千萬の遺憾と云はなければならぬまい。

桃太郎に組みし加勢した猿は、信念人がゐて適當にそれを命令し、教護し、聖業達成に間に合せて行くから、猿智恵も猿眞似も滑稽もなくならぬものであつたに違ひない。人の人たるは、眞似模倣から這入つても、遂に創造の世界を切り開き、追隨から獨創の天地に活躍するに至つて、眞の人生たり得る。こゝにも進化論の應用がある。アミーヴァから猿へ、猿から人間へ、人間から眞人へと、研究と、修養とを怠つてはなりませんまい。最後に「雉」が鳥の代表者であるのも面白

い。沈着にして先の見透しあるもの、靈鳥の一種なりとも云はれる。前途の災禍を豫言する能力ありとも云はれる。恐らく地震の如きも、一時間前に豫知して鳴くと傳はつてゐる。その鳴き聲によつてこれを判斷し、濃尾大震災の際古老から親しく示されたこともある。敢て不思議を物語る必要はない。雉は今日の飛行機に相當する。それ程輕妙自在、一寸先は暗の世の中に、智謀計策必ず適中する人物のことであると考へてよからう。

◇

何事も出来る出来ぬはさて置いて

いまなすことに全責任を負へ

話は大團圓を告げやうとする。智仁勇揃つたその上に、桃太郎以下全員が銘々の分擔受持を完うし、連絡あつて協心戮力、睡眠、休養、營養を云はず、身命財を惜まぬところ、赤鬼も青鬼も皆降伏し、鬼が島は遂に陥落して、鬼の頭目は「金、銀、珊瑚、綾、錦」の満載した寶車を奉つたのであります。こゝに第一回の雄圖は遂げられた。無論次

から次へと雄圖となるのが桃太郎の大生涯である。特に凱旋の後始末がこの物語の美しさである。論功行賞に職業俸給に携はるものゝ導きにもならうか。老夫婦なほ譽樂、欣然として一行を歓迎し、勞をねぎらい、成功を讃めし、前途を祝福するに、勝つて兎の緒を締めよと教訓したことであらう。その時桃太郎は「曳いて歸つたお寶をみんなに同じやうに分けてやりました」と結ぶところ、さしもの桃太郎物語も大團圓であります。

みんな日本人である。この信念でゆくのだ。家を中心し、この物語のねらひが當てはまるやうに、役立たせたい。十歳の桃太郎もある。二十、三十、四十、五十、乃至百歳の桃太郎もある譯だ。讀者各位は何歳なりやと問ひたいなつかしさだ。南無阿彌陀佛を以て日本の宗教界を統一し、一切を眞に活かす永遠の救済主「阿彌陀」にすべてを委せて、心に各自の生活を遂ぐべしと教へられた法然上人も、また桃太郎の一人だといふことを新しく讃仰したいと思ひます。(完)

信仰
感話

苦悶の世界から信仰の白道へ

夫と子等を失つた妻の苦悶

鎌倉光明寺法主

窪 川 旭 丈

鈴木とよさんが結婚して、東京日本橋區吳服町の路地は、主人才吉さんとさゝやかな家を持つたのは、今から三十五六年前の事であつた。

近所の魚河岸を目當に、大福餅や駄菓子等を商ひ始めたが、晝夜もいとほない夫婦共稼で、はたの目も羨ましい程の睦まじさであつた。そのうちに、可愛い女の子は生れるし、小金は目に見えて溜つて來た。人生とはどうしてこんなに楽しいものかと思ふやうな幸福な生活が続けられた。

然し、こんな幸福な家庭にも不幸な魔の手

が徐々に忍び寄つてゐた。明治三十六年の春から主人の才吉さんが肺を冒されてしまつた。いろ／＼の手當を施しはしたが、病勢はつゝのる一方であつた。手厚い看護の甲斐もなく、たうとう七月三十一日に三十九歳の働き壯りで逝つてしまつた。今迄の幸福な生活も一瞬にして崩れてしまつた。生活の重荷は一

三人の生命を預かつてゐる事を考へると、何時迄も悲しんでばかりはゐられなかつた。悲しみよりも責任の重さに、ひるみ勝ちな自分を鞭うつて、一生懸命に働いた。この不幸な中であつて、とよさんを慰め勵ましてくれるのは、一人娘のおしんであつた。どんなに疲れてゐても娘を見ると、元氣が溢れて來た。悲歎も子供の笑顔で歡喜に變つた。

さうしてゐる間に、不幸はまた訪れた。夫の死の翌年、七月三日に父親の助次郎さんが七十二歳でなくなつた。愈々女だけの淋しい家庭になつた。それでも、とよさんの心は少

しもひるまなかつた。ほんとに一家の中心となり、娘の生長を唯だ一つの慰めにして働きぬいて行つた。

だが、悪魔の手は何處までも執拗にからみつてくる。父親助次郎さんの三回忌も近づいた明治三十九年の五月に、次々に起つた痛ましい不幸の中にあつて、とよさんが最後の望みとして頼つてゐた一人娘のおしんが、學校から歸ると急に気分が悪いと云つて騒ぎ出した。驚いて診察してもらふと急性肺炎だ。とよさんの驚愕は言語に絶した。突然に明りを消された思ひで憤懣として手當に努めた。然し、運命はあく迄も惨酷に動いて行つた。

病勢は急進して、五月二十三日には、無惨にも最後の頼みであつた寶も、死が奪ひとつてしまつた。とよさんの悲歎はどんなであつたらう。この世には神も佛もない。と魂のぬけた如く、茫然自失してしまつた。何と云ふ運命の戯れであらうか。

この身の廻りに起つた不幸で、とよさんは寺参りをするやうになつたが、それも主人や

子供の墓参りが主で、佛様の信仰などは少しもなかつた。寧ろ持つて生れた勝氣から、神や佛はあるものか、若し神や佛があるのなら、こんな不幸には會はないだらう、と云ふやうな考へを持つてゐた。寺参りに來た時などに、私がいろ／＼信仰上の話をして聞かせたが、そんなわけだから、聞いてゐる時は「ハイハイ」と云つてゐるが、馬の耳に念佛で、少しも顧みようとはしなかつた。

おしんの死はとよさんを徹底的に打ちのめしたが、年老いた姑の事を考へると、何時迄も悲しみ歎いてばかりはゐらない。悲涙のうちをひきたてゝ家業を継ぎ出し、呉服町の借家から自分の家に移り、煙草や荒物等の商賣を始めた。行手に何の希望もない淋しい生活が營み始められた。然し、老母には楽しい生活を續けさせようと一心に働いた。近所の人達も、感心な女だと、何やかやといろ／＼面倒をみてくれたが、或る知人は、耳の遠い母と二人だけでは安心して店もやつてゆけないだらう、商賣の相談になるやうな

人を迎へたらどうだと熱心にすすめてくれたとよさんは今迄のいろんな不幸で、そんな氣持には全然なれなかつた。かへつて、新らしい主人を迎へて苦勞するより、淋しくはあるが、老母と二人で娘や主人の菩提を弔らひながら、氣樂に暮したいと思つてゐた。でも、餘り熱心にすゝめられるので、斷つてしまふのも悪い氣がして、どうでもなれと、總べてをその人にまかせた、その結果繁太郎と云ふ今の主人を迎へたのである。

この時、とよさんは既に四十二歳で、子供が出来ようなどとは夢にも考へなかつた。ところが、二三年経つと可愛い女の子が生れた。夫婦とも夢にも思はなかつた事だから、その喜は非常なものであつた。特にとよさんは長い間のひしがれた生活から開放されて、のびやかな氣持をやつと取り戻した。名前も前の子と同じくおしんと名付けて、夢中に可愛がつた。

さうして、夫婦とも子供の爲に働く一方、信仰など勿論省る暇もなかつた。とよ

さんは缺かさず行つてゐた墓参りも、止めてしまつて、たゞ子供への盲目的な愛に執らはれてしまつた。

丁度、大正八年の夏の事であつた。

子供はもう六歳になつて幼稚園に通つてゐたが、近所の人に無理にすゝめられて、長野の善光寺の團體参りに加つた。これもひとへに子供に幸運が授かるやうにとの氣持からで、おしんを連れて出發したが、信仰的な氣持は微塵もなかつた。

廻壇巡り、尼宮様の御十念も授かつて、

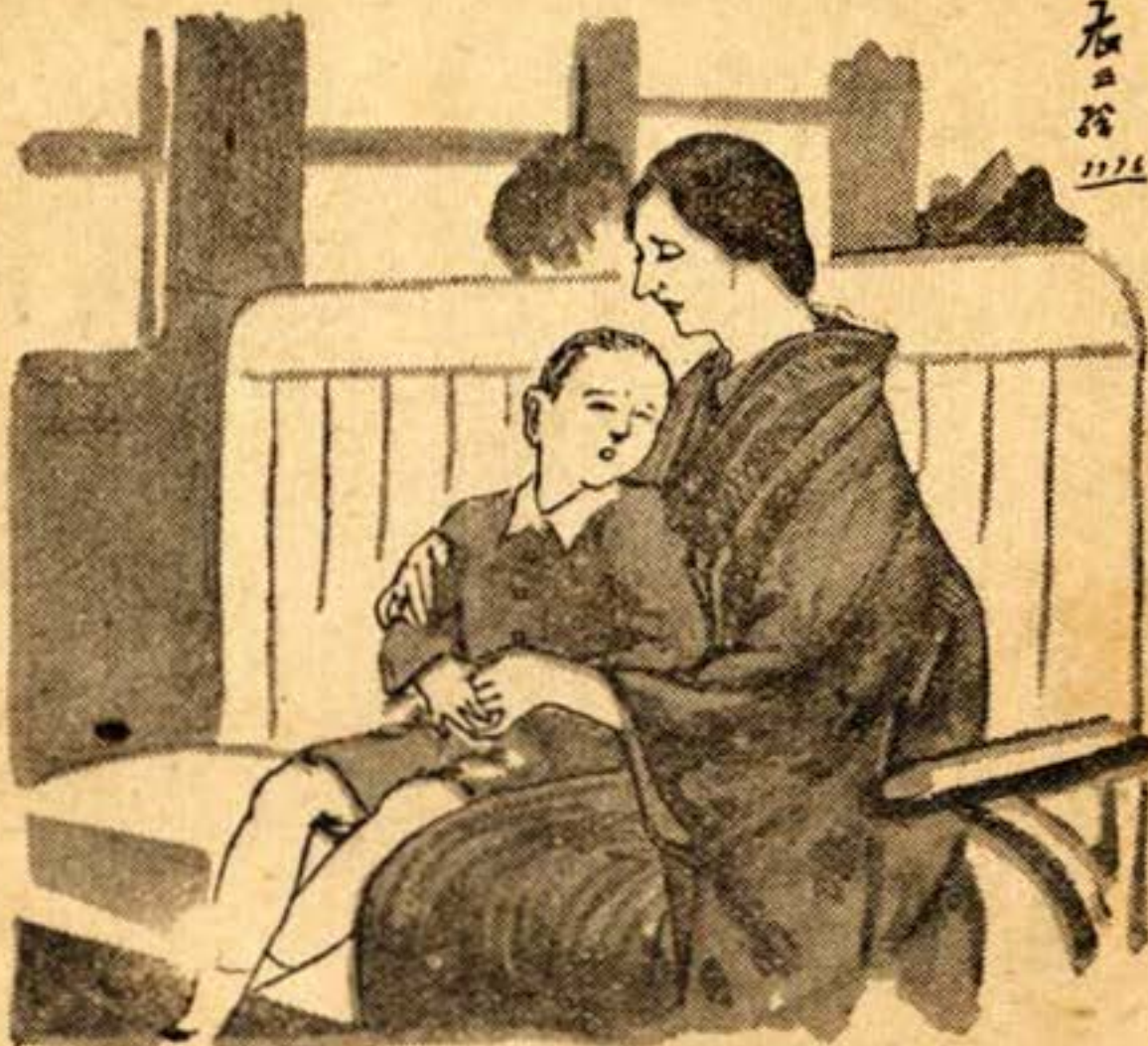
晴晴した氣持で、歸りの汽車に乗つた。始めての遊山ではあるし、可愛い子供と一緒にではあるし、とよさんは嬉しさで一ぱいになり、車外の景色も殊の外に美しく見えた。

汽車が川中島附近に來た時、今迄元氣に

騒いでゐたおしんが、急に腹が痛いと言ひ出した。熱もかなり高く、如何にも苦しさ

うであつたが、心配する程の事もなからうと、持ち合せの藥を與へて、應急の手當を施し、歸るとすぐに癒るから、それまで我慢なさい

おしん



と慰めてゐた。だが、苦しみは益々激しくなり、それに容態も何となく心配になつて來たので、熊谷驛に着くと慌てて下車して、熊谷病院に駆け込んだ。然し、その時は既に蟲の

ればいゝのか、何もかも判らなくなつてしまつた。

間もなく涙の中にお葬式は終つたが、とよさんは食事さへも咽喉に通らず、殆ど死んだやうにぼんやりしてゐた。主人も老母も、とよさんの身體を心配して、いろ／＼慰めたり勵ましたりしたが、一向に効目がない。私も七日七日に訪れては氣持を轉換させようと説教した。

『早く死んだ子も、子に死に別れたあんたも、因縁が悪かつたのだ。歎いたところで、もうとりかへしはつかないこと、それよりか、ほんとに子供が可愛いと思ふなら、子供の爲にお念佛を申して、菩提を弔らつておやりなさい。阿彌陀様はきつとあんたの苦痛を取り除いて下さる』

と慰めるが、興奮してゐる時だから、一向に聞き入れて呉れない。それどころか、重なる不幸で神や佛には頼れないと思ひこんでゐた處に、今度は善光寺参りで出來事だつたから、善光寺に子供をとられたと、佛を

仇敵と考へる始末で、前よりもかへつて宗教に冷淡になつてしまつた。

やがて満中陰も過ぎて百ヶ日が來た。とよさんの氣持もいくらか落付いて來たので、も一度説教してみた。

『あんたが死に別れて歎いてゐる子供は、もともと出來ないと考へてゐた子供ぢやないか。出來ないと思つてゐたのに、子供が出來たのは、如來様が授けられたのだ。そして、善光寺参りの途中で子供を奪ひ取つて、如來様があんたを自分の許に導かれようとしたのだ。牛に引かれて善光寺参りと云ふ言葉があるが、あんたは子供によつて如來様の許に導かれたのだ。子供の死は、實は如來様があんたを救ひとらうとなさる有難い御慈悲のおはからひだ。子供の冥福の爲にも、如來様の心にかなりやうにお念佛を申しなさい。』

氣が落付いた故か、今度は素直に聞き入れて呉れた。そしてお念佛も申し、佛様の有難さも幾分判つたやうだつた。

子供の冥福の爲だと云つて、幼稚園に百圓、

増上寺に五十圓寄附したのも、その頃であつた。

其後、大正十二年の大震災で家は焼失したが、幸に夫婦共に助かり、いち早く呉服町に歸つて、電車道に假普請で商賣を始めた。何しろ店の無い時だから、非常に繁昌したが、とよさんは私が勸誡師だつた關係から、加入して御傳法を頂いた。この五重相傳でスツカリ如來様の御慈悲を納得する事が出來た。幾多の不幸を経験して來ただけあつて、しつかりした信仰を獲得した。

『佛様は夫、親、子供の死と云ふ無常の手本を僅か四年の間にお示し下されたのに、私の煩惱からそれに氣付かず、たゞ神も佛もないと怨み通して來ました。佛様はそれでも尙私を見棄て給はず、主人を興へられ、子供を授けられて、私の迷ひを覺まさうとして下さいました。そして、遂には子供を導きとして佛様の御許に導かれんとせられたのです。何と云ふ有難いおはからひでせう。それなのに無

明の私は今の今迄それに氣がつかなくつたのです。勿體ない話です。この五重相傳でやつと心眼が開けました。』

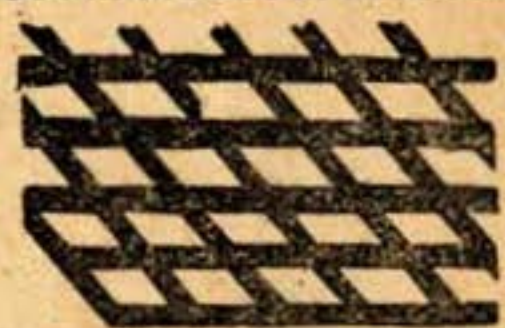
と有難涙にむせんたのであつた。

これから以後は、店の事は一切養子の姪にまかせ、信仰の道に精進し、翌年の大正十四年には、私が増上寺にゐたので、増上寺に常念佛を作り、専ら念佛生活にいそしむやうになつた。

常念佛は今日では會員も百二三十名の多數に上つて盛大であるが、幾度の苦痛な體驗を経て確立された鈴木とよさんの信仰の火は、烈々たるものがあつて、常念佛を開始して今日迄、一日も缺かさず参詣し、或時などは一りで勤めた事もある程である。常念佛の今日あるのも、實にこの不屈不撓の信仰力によるものである。

今日の鈴木とよさんは、俗事からは一切離れて、見るもの總べてが如來様の御慈悲に見えるると云ふ得難い信仰生活を續けてゐる。

(をはり)



富士川

—— 文覺と頼朝 ——

畠 四郎

扱て、治承四年六月には、平家は主上を擁し奉つて、都を福原へ遷しました。福原遷都の事はその年の十一月まで、約半年の間に過ぎませんでした。延暦以来三百八十餘年に亘る平安の京の都を、天が下萬民の反對を押し切つて、清盛人臣の身でありながら動かししまつた罪咎は、必ず重い天

罰を蒙らずにゐられません。そのあらはれの一つとして、遷都あつてからの福原の平家は、清盛を始め一門すべてが、饑饉の怪やさまざまな物怪に悩まされだして、夜晝心の安まる隙とてありません。——溺れる者は薬をも攪む、おのれ一門の安泰のためには國家の理非を省みない。いま、平家は

斷末魔のあがきをあがいてゐるのです。丁度その頃、伊豆の北條姪が小島で、十四の年から二十餘年流人の暮しを送つてゐた源頼朝の旗上げの知らせが、大きな波紋を描きながら平家方に傳はつて來ました。……

いつたい頼朝の旗上げには高雄の文覺上人の力が預つてゐるやうです。頼朝は、平治元年に父義朝が平家方に捕へられたとき既に亡い命だつたのを、池の禪尼の強つての乞ひによつて伊豆に流されたのでした。その後年を経るに従つて清盛もいつか頼朝の事を忘れてしまひ、彼もまた住めば都の例へで、この伊豆の小島に過去の記憶一切

を忘却して、島びとの營みをおのが營みに交へつつ、至極のんびりと暮してゐました。外界の風聞をよそにした安穩な島ぐらし。そのままだつたら源家興建に邁進し、天下を睥睨した一代の風雲兒頼朝將軍の熱血もその胸の中から逃り出るしほを見出せなかつたでせう。そこへひよつくり登場したのが文覺上人です。

荒行のこと

上西門院の武者所に遠藤武者盛遠といふ剛の者がをりました。遠藤氏はもと遠江國の住人でしたが、後攝津國に住するやうになりました。この若武者盛遠は十九の年に道心を發し、誓切つて諸國修行に出かけました。まづ修行といふものはどれくらゐ辛いものか試してみようと思ひ、炎天の夏の日、或山里の藪の中へ入つて、裸體となつて七日間仰臥したままでゐました。喉の渴き、飢ゑはもとより、蛇蚊その他の毒蟲

ども、身にしと取つて刺し喰ひするのにも意に介せず、ちつとも身體を動かしません。八日目になつてやつと起上りました。が、一向けろりとしたものです。その自分の體験談を人に語りますと、「よくまあ命が無事でしたなあ。」と驚いた返事です。そこで、これくらゐで世間が驚くなら、修行なんて樂なものだと心に背きながら、彼は名も文覺と改め、やがて紀州熊野へ出てまゐりました。那智籠りです。時は十二月のはじめ、雪降り積つて、谷の小川も凍りついて音なく、瀧の白絲はみなつらになつて白一色、あたりの木々の梢も見分けがつかせません。然るに文覺は瀧壺の中に下り浸り、頸際まで水に漬つて一心不亂に咒文を唱へはじめました。かうして一日、二日と過ぎて行きましたが、さすがに嚴冬の山氣に、五日目にはもはや正體を失つて岩藓を浮きつ沈みつ、このまま現世を去つて行くかに見えました。と、そこへ何處からともなく

美しい童子が一人歩み來つて、文覺の身體を引上げたのです。そして火を焚いて暖め、ますうちに、文覺は息を吹きかへしました。ところが眼を見開くや否や、彼は荒々しく聲を張りあげ、「われ大願あつて三七日の間この瀧に打たれんと思ふに、未だ五日にすぎざるを何用あつてかくはするぞ。」と怒號しながら、また直ちに瀧壺に飛込んでしまひました。次の日には八人の童子がやつて來て、文覺の左右の手を取つて水から引上げようとしたのですが、飽くまで争うて壺を離れません。しかし文覺とても人間の身、第三日には息が絶えました。時に、瀧の上方から天童二人が舞ひ下りるやうに文覺の傍にまゐつて、頭の上から手足の爪さきまで撫でくだしました。すると不思議に文覺のいのちは甦つたのです。「わたし如き者の身をかくまで憐み下さるのは、いつたいどなたでございませうか。」文覺は二度目の救命にひたすら恐懼して申



し述べますと、「我等はこれ不動明王の御使ひ、文覺無上の願を發し、勇猛の行を企つ、行つて力を併せよとの命によつて來れるぞ。」答へが終ると、そこにはもう二童子の姿がありません。文覺は大聖不動明王の感應あつたかと悦び勇み、なほ瀧壺に歸つて目出度く三七日の大願を成就しました。

その後、文覺は高野、立山、富士、戸隠など全國を行脚しつづけ、「双の驗者」の異名をとつてまはりましたが、高雄の山奥に行ひ澄ますに及んで、和氣清鷹の建立にかゝる神護寺の修造勸進の願を立てました。勸進帳を捧げて諸々を歩いた末、京に上つて院の御所法住寺殿へ參上の砌り、丁度御遊の最中であつたので公卿、殿上人を始め平家一門の不興を買つて、遂に安藤武者右宗と亂闘の末捕へられ、伊豆遠流の刑に處せられたのでした。

文覺の住地に當てられた伊豆の奈古屋は、頼朝の姪が小島に極く近いのです。随つて文覺は暇をみては頼朝のところへ出かけ、いろいろの物語をしました。「いま世間を見渡したところ、平家の運命も末路、源平兩家の中にあつて、あなたほど天下の將軍の相をもつた者は他にありません。早く旗上げをしたら如何でせうか。」かう説きすゝ

める文覺に對し、「いやそれは心外です。私は池の禪尼に助けられた恩に報いるため、毎日法華經一部轉讀するほか、何も考へないのです。」と頼朝は耳を傾けません。然し文覺は、「時至つて行はないのは、却つて災を蒙るものです。」と主張して肯きません。そして父義朝の旗上げの理から懇々と説いて、頼朝の心を感ぜようと努力しました。頼朝も亡き父の事を云はれて、涙の中に文覺の言に惹かれてゐる自分を感じるのでした。「けれども旗上げするとしても、私は流人の身でありますから勅勘の赦しを得た上でなければ何も出來ません。それをどうしませう。」と云はれた時、文覺は「それは譯ありません。こゝから今の都福原へ上るのに三日、院宣を伺ふのに一日、都合七日の仕事です。それはかく云ひだした文覺が必ず果してまゐります。」と答へて名古屋に戻ると、伊豆の御山に七日の參籠といふ振れを出して、こつそり旅に立つてしまひ

ました。八日目の午頃です。「平氏王化を蔑如して政道に憚る事なし。然れば神道の冥助に任せ、且つは勅宣の旨趣を守つて、早く平氏の一類を亡して朝家の怨敵を退けよ」の院宣を奉つて、文覺は頼朝のもとに歸つて來ました。新しい烏帽子、淨衣を著けた頼朝は、三度院宣を拜して、このときほんたうに平家惣伐の決意を固めました。

富士川敗戦

扱て、福原は頼朝謀叛の報でこつた返しです。源氏の勢が揃はぬうちに撃滅せねばといふので早速維盛を總大將に、平家勢すべて三萬餘騎、東への道をとりましたが、途々軍に加はる數多く、富士川に著いた頃にはその勢七萬餘騎となつてゐました。然るに鎌倉に本據を置いた源氏勢には、甲斐信濃の一族まで馳せ參じて、その數二十萬騎といふ噂が立ちました。野も山も駿河一帶源氏勢に加擔するといふ取沙汰に、さす

が都育ちの維盛の心中には動搖のいろが見えました。平家が東國の案内者として召抱へた齋藤別當實盛の申すには「軍といふものは親も討たれよ子も討たれよ、死ねば乗越え乗越え戦ふものです。西國の軍はさうでない、親討たれよば引退いて佛事孝養し、忌明けては寄せ、子討たれよば歎いて寄せない。東國と全く違ふわけです。然し、すべて戦ふときは軍勢の多少によらず、大將軍の策に依るものですから心配はいたしません。」これを聞いた兵共は、日頃の東武者の考へを裏書きされたやうな氣になつて、皆慍きふるへるのでした。

治承四年十月二十四日、卯の刻を以て、富士川で源平の矢合せときまりました。その前夜、平家の兵共が源氏の陣を見渡し、たところ、伊豆駿河の人々がいくさに恐れ、野山に隠れ、或は舟に乗つて海に浮んで火を焚くのを見誤り、「何と源氏陣の遠火の多いことよ、野も山も海も川も、皆源氏武者なのだ」と口々に喚いて右往左往しはじめ

ました。ところが夜中になつて、富士の沼に群れてゐる水鳥の、何に驚いてか一時にぱつと飛立つた羽音が、まるで雷鳴のやうに聞えました。「さては源氏が向つて來た」さうなると浮足立つた兵共は鳥合の衆にかはりありません。敵に取籠められては叶はないと、一先づ爰を落ちて尾張で待機せうとの大將軍の下知を得たりとばかり、我先きにと落ちて行きました。そして夜明けまでには、平家の陣屋はまつたくがらあきになつてしまひました。翌日、源氏二十萬騎、富士川に押寄せて大地も揺ぐばかりに三度關を作つてみたが、答へがありません。この始末です。——頼朝は馬から降りると、甲を脱ぎ、手水嗽をして遙か王城を伏拜んで「これは全くこの頼朝の手柄ではない、ひとへに八幡大菩薩の御計ひである」と申しました。

駿河國を一條次郎忠頼に、遠江國を安田三郎義定に預けて、頼朝はいつたん鎌倉に戻つたのでした。

●● 隨 想 ●●

愚癡にかへる

藤 秀 環

聖道門の修行は智慧をきはめて生死をはなれ、
淨土門の修行は愚癡にかへりて極樂にむさる。

これは法然上人のお言葉である。愚癡にかへる、かういふ言葉は今日の世の中には、あまり評判のよささうな言葉とは思はれません。また、愚癡がすなはち無明煩惱で、その無明こそわれらの永い迷ひと苦しみの根元であるといふ佛法の普通の見方からは、愚癡にかへれなどといふことは意味のないことになるかも知れません。しかし、さういふ道理を一通り心得ての上に、

わたくしは近頃この法然上人のお言葉を、素直にありがたく戴いてをるのであります。

わたしどもの日常生活の悩みといふものは、常に自分の小さい「はからひ」に根ざしてゐるやうである。はからひとは右せんか、左せんかといふ取捨分別であります。この取捨と分別とがなかつたならば、この複雑さはまりのない世上を歩むことは出来ないけれど、またこの取捨分別のために囚はれて、自縛自縛して苦しむことも、ずるぶん多いのである。それは、その取捨と分別とが常に小さい自分の御都合主義から出發してゐて、誰れが見ても耻かしからぬ公けの道に立つてゐないから、いつも「うまく行く」「まづく行く」といふ功利心から一步も脱け出ることが出来ないからであります。この功利心がわたしどもを生涯低級低調な境地につなぎとめ、われわれを苦しめ悩ますのであります。

しかし、人間がいよいよ切羽詰つたところへ追ひ込められると、人間の「はからひ」といふものが何の役にも立たぬものだといふことが解つて来る。むしろこの小賢しい「はからひ」がいかに人間を殺してゐるかといふことに驚くのであります。さういふ切羽詰つた境遇が、いつも身邊に迫つてゐるわけではな

いが、さういふ時が何時迫つても安立不動のものがわれわれの内面になかつたならば、日常生活の歩みがふらふらして、とても危かしくて見てはをられんのであります。

法然上人の「愚癡にかへる」とは、愚癡ならざるものが愚癡無智のすがたを現はしたり、愚かな自分を承知しながら賢善の相を現じたりさういふ小賢しい「はからひ」をすてゝ、如來のおん前に幼兒のやうな素直さに歸へることを仰せられたものであります。智慧第一の法然房とうたはれ、大勢至菩薩の化身と仰がれた法然上人が、「愚癡にかへりて極樂にうまる」といはれたところに、他力淨土教の眞面目が光つてゐる。いや、一切の宗教といふものの源底に、この法然上人のこゝろが横たはつてこそ、宗教が宗教たり得るのではあるまいか。たとひ智慧をきはめて生死を離れんとする自力教の聖者といへども、三寶神明の哀愍と覆護を乞はれなかつた方のないのを見ても、この間の消息がわかると思ふのであります。

一體、人間が宗教を持つといふことは、複雑多様、千變萬化して停るところを知らぬ世界に、單一純粹な道を開かうといふ目的によるのであります。純粹であつてゆるぎのない心の世界は、われわれ人間のみが内面の奥に持つことが出来るものであ

る。これを持たなければ、名譽、財物、學識、地位等、ありとあらゆるものを具足してゐても不幸である。人間が人間として本當に重んぜられる所以は、ゆるぎのない安住の境を心に持つといふことであります。そこから流れ出たものでなければ、眞實の高い價值を見ることが出来ないであります。

それであるから、智慧をきはめて生死を離れんとする聖道の勇士は、道をさまたげる一切のものを捨て、善なるもの、美なるものの一切を、この道の完成のために廻向して、まつしぐらに進むのである。廻向とは、この大道のために役立たせることであります。この道はまことに遙かな險難な道であるけれども、この道より外に認めることの出来ぬ人々は、泣いても笑ふても、たゞ一とむきに行くより外はないのであります。

しかるに、法然上人は、もう一つの生死を離れる道を見つけ出された。見つけ出したといふよりも、與へられ恵まれたといふ方が本當かも知れません。それは念佛成佛の大道であります。念佛とは南無阿彌陀佛を信じ稱へることである。これは複雑多様のものの中から念佛の一行をわが上人が勝手に選び出したのではなくして、無量無邊の生死解脱の道のなかから、たゞ念佛の一行を選んでおあたへ下さる如來の天心の前にひれ伏して、南無阿彌陀佛を頂くこゝろであります。頂くものには理窟はな

い。たゞこの南無阿彌陀佛のうちに一切の善なるもの、美なるもの、至眞なる佛の大生命が十全圓滿に具足して、足らはぬところの更になんことを感知するのみであります。そこには人間の小智、分別、はからひをゆるさない尊い大きなものがある。人知を絶してをる。そこに參道直入しないうちには、人間の智慧は單なる世智辨聰に過ぎないのである。愚癡にかへりて極樂にむまるといふ法然上人のお言葉の眞風景は、そこにあると信ぜられるのであります。

わたくしは近頃ある人から有難い詩を聞きました。佐賀の方の或る無學素純な老婦人の法悦のうたであります。

智者や聖者ぢやまいれぬ淨土

愚癡なわたしは正客よ

愚癡ぢやござれど學者でござる

一切經をばみなよみました

一切經をばどんなに讀んだ

そのまゝ來いよとよみました

正客とは宴會でいへば主賓である。阿彌陀佛の本願は「十方

衆生」に呼びかけたまふけれども、智者聖者はみづから智慧をきはめ徳を積んで生死を離れることも出來やうが、智慧の目が

昏く戒行の足の弱い愚癡のものこそ、まづ大悲大願の正機であるといふ意味である。また、「そのまゝ來いよ」とは、法然上人の隔世の師たる唐の善導大師の二河譬喻に見える「一心正念にして直ちに來れ、我れ能く汝を護らん」の句を古來の淨土教徒が、そのまゝ頂いた味到の言葉であると思はれるのであります。愚癡にかへりて極樂にむまるといふ法然上人のお言葉を、この無智無學の老嫗が自分の言葉で表現してゐるやうに思はれ、尊くありがたくこの法悦のうたを聞いたのであります。

勅修御傳の中に、

生けらば念佛の功つもり 死なば淨土にまいりなん

とてもかくてもこの身には 思ひわづらふ事ぞなき

といふ今様のうたがある。これを今様と見ていゝかどうかは異

論もあらうが、文字の形は確かに立派な詩となつてをる。法然

上人の御法語として御傳に載つてゐるから、詩とすれば上人を

作者と見るべきであります。

朗々として誦すべき詩だ。智者の詩ではなくして愚人の詩で

あります。愚癡にかへりて極樂にむまるといふ人の大安住の心境と、

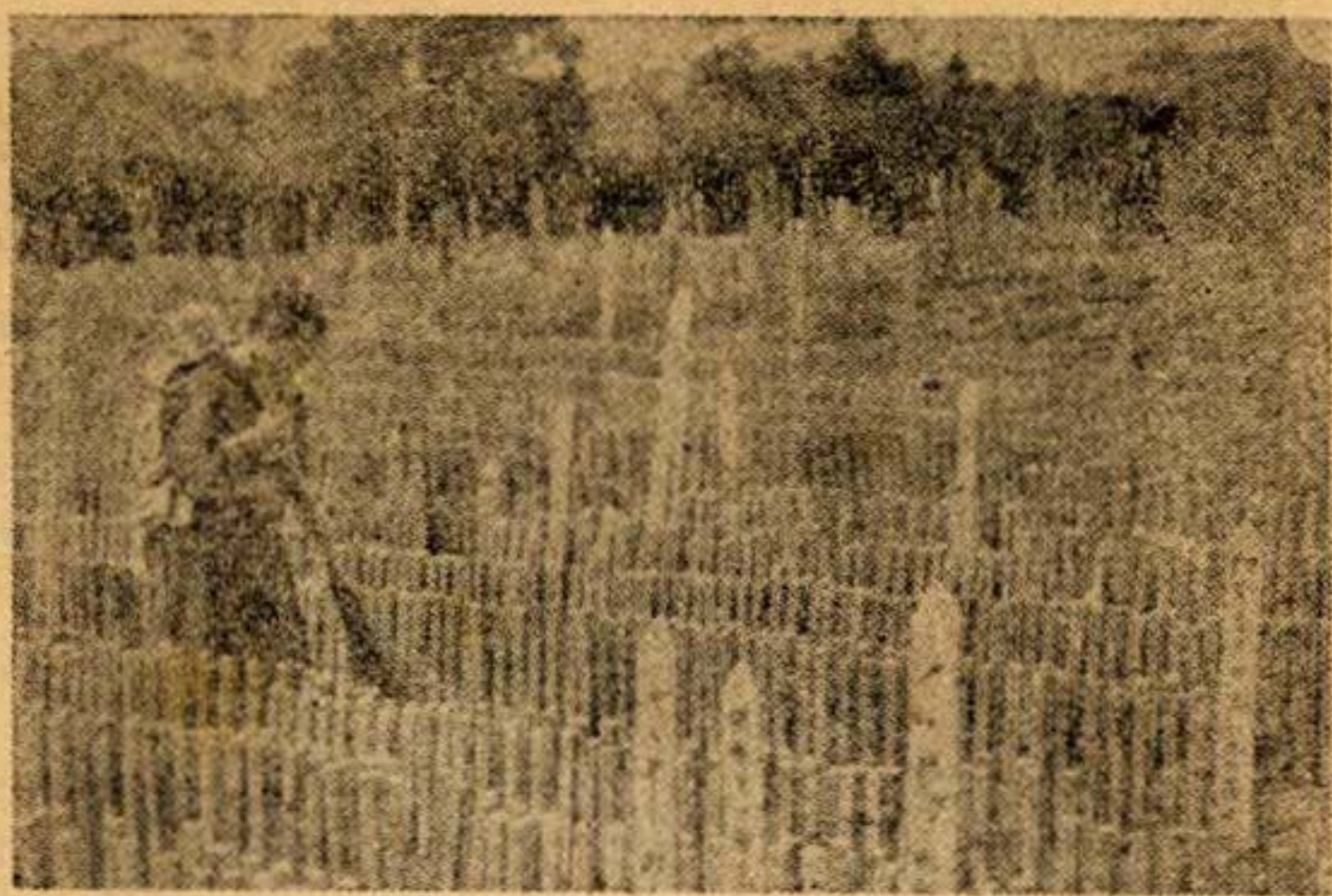
生の歩みのたしかさ、力づよさをこれほどに表現した詩は稀れ

であると思はれます。

犬猫にも浄土の喜び

人間も顔負けする犬猫の寺
とその墓地を訪ねるの記

本誌記者



る。然し未だぼす佛の大慈悲心の程を示すのも仲々よろしく、犬猫属の霊もこれに、溝や川に無無駄ではない——と云ふところから、記者の大泉の有名な、犬猫の墓の訪問とはなつたのである。

萬事人間並以上

一日、東京大塚浄土宗西信寺（これが有名な犬猫の寺）栗本俊道氏の御案内を願つて、池袋から武蔵野線に乗じて石神井まで、そこからバスに乗つて「犬猫の墓」まで行く。この附近は石神井公園大泉新興キネマ撮影所、大泉農園、八坂神社、白子川沿岸、大泉使役犬訓練学校、成増兎月園、豊島園など名勝の地があつて、風致

ワン公やニヤン公でも立派な墓を持つてゐると云ふことを知つて、併せて惨忍酷薄なる或る種の人間種属の蒙を開き、禽獸にも及

君の墓は大泉新興撮影所と頂度背中合せになつてゐる。先づそこへ行つて度臈を抜かれたのは、玩具の兵隊の分列式見たいに小さな墓標と塔婆の見渡す限りの行列である。尤も犬猫属にも自から階級が出来上つて仕舞つたらしく、墓地にも普通、特設、専用の別が

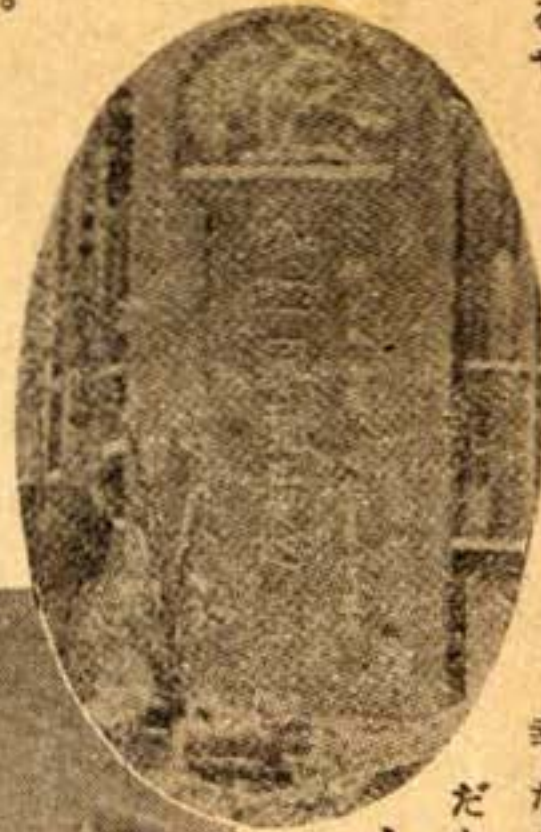
あつて、普通の方が、櫛の齒式行列式の墓標の方、いはば追込みの方であるが、墓標には一々「何々家タマ子の墓」と俗名(?)が書かれてあるから、間違へるやうなことは全然ない。

特設の方はコンクリートで區劃されて、稍ゆとりもあつて、兎に角こゝではリン公、ニヤン公

も一國一城の主である。追込みと較べれば先づ椅子席と云つたところ。

然しこの追込み椅子席が合はせてざつと五萬あるだらうと云ふからまた驚く。何でも、犬猫の寺となつて世間にデビューしてもう三十年になるのだからさもありう。

これが皆んな生きてゐたら、犬猫寺大泉墓地はさぞ大變な騒ぎだらうと餘計な心配をしてしまふ。



然しこの墓地の偉觀はなんと云つても、特等席、貴賓席に當る専用墓地の方である。これ迄は、犬猫も良い日の下に生れた奴は

幸なもん
だと思ふ位

愛猫美い公の墓はその雄なるものであつて、人間の身の丈もある程の大きな石碑に、美術學校教授の手になる猫の浮彫があつて、「入江家愛猫之墓」わきに雄三毛十歳昭和×年×月と彫つてある。小泉親彦軍醫總監閣下の「愛狎たま之墓」も、俳優喜多村縁郎の「愛犬



ゐのものが、この専用墓地を眺めては、嗚呼、我等人間何んするものぞ、と嘆じ

たくなるばかりの立派やかな墓が澤山ある。中でも澁谷の生花の御師匠さんで入江さんと云ふ人の

「ルパン之墓」も石塔の豪華版だ。これなどを見ると、全く「犬猫に劣る」人間もあるものだわいと慨

嘆したくなる。その他猫になりたいやうな(さもししい奴だなど云ふのは、先づ大泉を訪ねてからにして貰ひ度い)墓が澤山ある。生きてゐるときは定めし贅澤をして甘いものも澤山食つたんだらうな。(これ! 浅間しいことを云ふな!)

幸福なる犬猫よ

この中での變り種は高松宮さまの御愛犬アロー、ネリーの墓、久通宮さまのルリー、竹田宮さまの孔雀など御愛犬猫、澁澤篤二氏の、犬屬二十餘頭、郷誠之助男の愛猫四頭、毛内中將の親子九匹の犬など大量的に埋められてゐる。派手なところで中村吉右衛門、守田勘彌、花柳章太郎、喜多村縁郎、水谷八重子の愛犬などである。

(寫眞上は代表的墓石、下は火葬の前に立つ栗本師)

玉の側に埋めてくれ

これらの犬猫の死體はいづれも火葬に附されるのだと云ふので、新らしく出来た火葬場の方へも案内して頂いた。

これも驚いたものの、一つだが、人間の焼場にも勝るとも劣らぬやうな立派なもの、電気重油火葬爐と云ふのださうで、四十分待つてゐるとタマ君、ボチ君の骨上げが出来ると云ふ譯。経費貳萬圓を投じた世界最初の動物火葬場ださうだ。(一度行つて見給へ、焼いて貰ひたくなる、——まさか)

死んでからも人間並或ひはそれ以上に取扱はれてゐる位であるから、飼主の愛着も深く、命日には必ず花を捧げたり、生前好んだ食物などを持って墓参する人が多くあると云ふ。中には死んだら玉の側へ埋めて下さいと云ふ婦

人もあると云ふ位であるから、禽獸にまで及ぼす人間の愛情には正に佛の慈悲も顔負けである。

犬猫の癖

幾度も驚かされ、且つその蒙を開かれた記者は更に栗本師に犬猫の寺に就いてのお話をうけたまはつた。

漱石の猫の言葉を借りると「人間は我儘なものだと斷言せざるを得ない」さうであるがこれは全くだ。

元來犬、猫、馬などは大昔から人間に飼はれて、われわれの生活には不可欠なもので、家族の一員同様に取扱はれて來てゐる。だから昔から忠犬、忠猫などの實話は山程ある。(仲には化猫など云ふけしからんものもあるが原則があるからには例外は許さなければならん。)最近では忠犬八公など

はその雄なるものであつて、人間もこれ等忠犬、忠猫によつてやうやく目が開かれたものと見へて、八公の銅像までも作り上げた美談(?)もあるが、また一方にはまだ

これ等動物が人間の忠實なる家來であり、奴隸であり、愛顧物であるの故を以つて、誠に暴君的態度で、これを酷使する封建的意識が

残存してゐる。殺してから皮は三味線に賣り、肉はおしやます鍋にする底の悪風が少なからず残存し

てゐる。だから犬猫を生きながら蜜柑箱に押込んで川流しにしそれを棒でつゝいたり、縄で首をつるし上げたりする悪童も出て來る譯

である。大川に川流れになり、野曝しになつてとても浮ばれそうもない格好で都市美と衛生とを害してゐるのは、それら、犬猫の悪運

にもよるだらうが、結局する處はかやうな畜生道にも陥つべき

人間の悪風のなす技である。だから、設備の完全した犬猫埋葬場を設置して、犬猫をして安らかに極樂往生せしむるのは、先きに述べたやうな人間の暴君的要素を根絶し、その愛禽獸にも及ぶ佛の大慈悲心を發揚させる素地を作ると云ふものだ。——

と云つたやうな話を聞いて、子供の時分に小犬を川で泳がせやうとして、遂に締め殺してしまつた覚えのある記者は、いさゝか冷汗を流したことであつた。去る十一月三日城東區大島町で火事を知らせて家族一同を避難させ、自分分は逃げ後れてオルガンの下で焼死した忠犬「クロ」は新聞で耳新らしい話だが、此の犬猫の寺で町重に葬られ、特に「顯性殉忠畜犬」の戒名(?)が付いてこゝ大泉の墓地に永眠の所を得て淨土の悦びに浸つてゐるのである。

悪人また済



飯島日光

中島松二画

橋上の悪人

氣の早い蝙蝠が、頭上を掠めて飛び初めた黄昏間近の三條大橋は、家路を急ぐ町方、近在の男女達、または武家、網代の笠に珠数を揉んだ法師のたぐいが、ひっきり無しに行交ふて、暮れ憺む夏の夕ぐれに似ず何んとなく遠しい。

が、その遠しさを他目に、先刻から欄干の程に兩肘を突いて、見るともなく足許の長閑な加茂の清流を見下しながら、人も無げに、汗と埃に汚れた衣服の前をまくつて、毛むくじやらな胸を一杯に露出したまゝ、日中の乾蒸の炎暑とは打つて變つた川面の涼を、心行く許り味つてゐるむくつけき大男、――

頭髮は蓬のやうに亂れ、頬から顎下へかけて針金のやうな鬚は伸び放題に伸び、而かも左眼を中心にした大きな赤痣は、一層この男を醜く残忍に見せ、薄闇で偶然顔を突き合せた者は、例へた子供の手合ひで無くとも、思はず膽を冷やすであらうと思はれる許り……

31ま



黄昏とは云へまだ陽のある心強さか、言ひ合したやうに振り返つて、氣味悪さうに見送つて行く人々の視線を、この男、一向氣にもかけぬらしく、厚い唇を歪めて、にや／＼薄ら笑みを浮べてゐたが、

「ふ、ふ、ふ、ふ……」

と、突然思ひ出したやうな含み笑ひをして、

「——弊島の里を出てから恰度三日目、こうも獲物らしい獲物が無くては、音に聞えた耳四郎もトンと形無しぢやと思ふたのに、流石は洛、聞きしに勝る繁昌ぢや。見渡す限り涯しもない薨の波、唐布を織るやうな人の雑沓、何處を見ても草深い田舎とは違つて、蚊の

飛ぶ寸隙も無い有様ぢや。は、は、は、は、……惡に生れた耳四郎が一生一代の運だめし、度胸だめしには、こよなき職場ぢや。」

腰に差した刀の柄をトンと叩いて呟くのを開けば、この男こそ、當時、攝津弊島を根城として、河内、和泉、山城、大和の近隣はもとよりのこと遠くは丹波、播磨の山里にまで風の如く魔の如く出没し、強盜、強姦は云ふに及ばず、放火、殺人の慘逆を擅にして、その名は惡の代名詞の如く近畿一圓に鳴り響いてゐるといふ稀代の極惡、怪盜耳四郎が餓えた狼の如く、京の繁華に獲物や

ある、と牙を鳴らして、はる／＼入洛して來た旅の姿であつた。

耳四郎は足許の小石を一つ、ぼーんと蹴落してから、鷹揚に伸び上つた。

「盜賊を稼業とする冥利には、洛の寶物は皆吾がものも同然ぢやが差當り黄金が無くては不自由ぢや。」

耳四郎は何物かを物色するやうに、今しも紫紺色に暮れかゝつた比叡の山裾から、なだらな東山へかけて、射るやうな鋭い視線を投げかけたが、其の眼は次第に洛中に注がれ、魅て空衝く老木の繁茂が、一際目立つた白河院の邊りへ來てはたと止まつた。

「おゝ、あれだ！」

と、耳四郎は莞爾として兩手を打った。

「——風の便りに聞けば賣主奴、大分貯めこんだらしいとの事だが入洛の籠手調へには手頃な場所ぢや。は、は、は、は……耳四郎良い處へ氣が付いたわい。」

彼は肩を大きく揺つて笑つた。

一しきり山の端に沈んだ残照が、ぱつと彼方の浮雲に反映した、と間もなく光りはせせらぐ加茂の川底に吸ひ盡されて、後には薄墨が音もなく這ひ寄つてゐた。

黒谷の聖者

それから一刻の後、鬱蒼と林立する檜や杉の巨木に囲まれた白河御房の前の暗い廣場に、今宵も上人の御法談を聴聞せんものと、潮のやうに押し寄せてゐる善男善女の群衆に交つて、耳四郎はそれとなく、周囲の氣配に眼を配つてゐた。

御房は當時、天台、眞言の兩派を壓して旭日の勢にある、偉聖法然上人の説法所にしては、思ひのほか質素な建物で、正面の駄々ッ廣い本堂には、今しも弟子達の手によつて灯が赫々とともされ、早や、御法談の時刻が迫つたものと見えて、廣場の善男善女は列を作つて、次々と本堂に遣入つていつた。

「不可解ぢや。この熱に浮かされたやうな幾百の妄者共、一體、何

を賣僧から聞かされたと言ふのぢや？」

耳四郎は先刻から群衆の中で、幾度となく耳にした上人に對する讃仰の言葉、而も誰一人としてそれを反駁するものとは無く、上人を中心にして、渾然と一つに解け合つてゐるこの場の有様が、たゞ、徒らに不可解であつたのだ。惡逆無道を以て自ら任じ、人々から恐怖と戰慄の的となることを以て、自らの誇りとして來た彼にとつては、事實、救ひを求めて集ひ寄るこの多くの人々の行爲が、解き難い謎であつたに違ひない。

が、疑問は疑問として、胸を打つやうな敬虔な四圍の雰圍氣と、目の當り見る善男善女の安らかな姿は、荒び切つた彼の心の底に、不圖、人間らしい寂しさを呼び醒さずには置かなかつた。

彼は好奇心とも良心ともつかぬ氣持で、このまゝ人々の後に續いて、御説法を聴いて見たいやうな衝動に驅られたのだ。

耳四郎は、知らず知らず一步、二步、三步……と吸ひ寄せられたやうに、本堂の入口まで來てしまつて、はッ——として立ち止まつた。

「は、は、は、は……耳四郎としたことが、何んたる態ぢや。人間は生れた最初から惡は惡、善は善と定められたものなのぢや。儼程の極惡が一時にもせよ、なまじ佛に近寄りうとは笑止の骨頂、大惡を大惡として、潔く生き抜くのが、男子の本懐ぢや。意地なのぢや。」

耳四郎はさう思ひ直すと、強いて心に納得するやうに、今迄に幾

多の人々の生血を吸つて來た愛刀を、ぎゅツと握り締めた。と、見る／＼彼の兩眼は殺氣を帯び、歪んだ唇は冷めたく鬼氣を生じた。

「坊主の説教を寝物語りに、ゆつくり旅の疲れを休めた上で、仕事にかゝるも一興ぢや。」

耳四郎は、そのまゝ夏艸が繁つた御房の裏手に廻つていつて、床下にもぐり込んだ。床下といつても可成りの高さで、腹這ひにならずともゆつくり出入の出来る程度だつた。

心を塞くして寝る浮世の住居より、彼にとつては結句、床下の世界の方が氣が樂だつた。たゞ、蜘蛛の巣が顔にかゝり、蠶蚊が算を亂して競ひかゝつたが、慣れた業の彼には些程氣にもならなかつた。



夜目の利く彼は土臺柱を避け乍ら、本堂の眞下と思はれる處まで來ると、兩手を頭の上で組んでごろりと仰向けに寝轉んだ。

「ふ、ふ、ふ、ふ……疊一重が地獄と極樂の境ぢや。坊主奴！己れの生命も知らずに、何にをほざき出すことやら……」

耳四郎はかくも多くの人々の心を收斂し、世の信望を一身に擔ふ上人の、生殺與奪の權を握つたやうな云ひやうのない誇らしさに胸をわく／＼させ乍ら、今にも聞こえて來るであらう上人の説法を耳唄に、旅寢の夢を結ばうとして、靜かに兩眼を閉ぢたまゝ、耳を傾けた。

間もなく、打ち鳴らす鐘の音と共に幾百の讀經の聲が、高く低く更けゆく夜半に縷々として聞え初めたが、それもいつしか止み、周

園はまたもとの静寂に立ち返つて、遠く流れる加茂の水音が、さら／＼と彼の耳許に迫り、近くにすだく蟲の音が、心の底を抉るやうに、無情に物悲しく聞えて來た。まことに清淨の境、業繁悉く解脱するかと思はれるやうな静かな宵だつた。

耳四郎が吾知らず吐息をついて、寢返りを打つた途端だつた。錆びのある氣高い聲が、而かも力強く、總ての人々の魂を呼び醒さずには置かないやうな嚴かな聲が、靜かに流れて來た。

「末法濁世の現時に於て、誰かよく、三學の聖道、六波羅密の難行に堪え得るものがあらうか。朝な夕な、たゞ三毒の業火に身を燃やしなから、破戒邪見に餘念もない我等凡夫に、出離得道の淨業などは、思ひもよらぬことなのぢや。三途の冥暗、墮獄の關門に一步は一步と、近寄つてゐるのも知らずに、昨日と過ぎ今日と送つて驚きもせず、そののみか、長生不老龜百歳の形體を保たうと思ひ詰めてゐるとは、淺間しくも悲しき限りでは無いか、經に、十惡、五逆、法謗、闍提の機と曰はせたのは、かゝる淺ましい我等の身なのぢや。恒沙の諸佛も、十方の薩埵も、救ふに手段のない穢濁の身なのぢや。さりながら聽聞の處罪業重しと悲しまなくてもよい。障り多しと惧れなくてもよい。彌陀因位の時の五却の思惟と、永却の御修行は、皆、かゝる救ひ手のない我等を不憫と思召されて、いかなる極惡非道な人々も、一人漏らさず救はんとして、こゝに趙世稀有の大願を建立せられたのぢや。」

耳四郎は、はッ！ として聞き耳を立てた。(いかなる極惡非道な惡人でも救はれる……) 上人のこの言葉は、所詮、救はれないと信じ諦めきつてゐた彼の心に、思ひがけない衝動を與えたのだ。(儂でさへ？ 儂のやうな沒義道な輩でも？) 彼は初めて聞いた救ひの言葉に、吾が耳を疑つた。

耳四郎は何時の間にか起き上つて、地面にぼつねんと座つたまゝ、尙も上人の言葉を聞き洩らすまいとして片唾を呑んだ。

「五濁惡世に生を受けた吾等凡夫の救はれて行く途は、たゞ、念佛の外には無いのぢや。煩悩に明け煩悩に暮るゝ身も、たゞ一聲の稱名によつて、無明長夜の罪は消えて、永く不退にかなふことこそ、彌陀の本願、稀有最勝の法門であるのぢや。彼方の對岸上より彌陀が喚んで曰ふには、汝、一心正念にして直に來れ、我よく汝を護らん。」と、十劫正覺の古より、かく喚び續け給ふてゐる彌陀の御聲が聞えるではないか。……若くは不生者と誓はせ給ひ、不取正覺と叫ばせ給ふ。嗚呼！ 何をか躊躇し、何をか疑はん。大聖の金口と彌陀の誓願、只だひたすらに、信じて迷はず、時を距てず、處を選ばずたゞ專念に稱名を稱えるのぢや……」

御法談は尙も言々句々、肺腑を抉るやうに流れて來る。善人も惡人も只だこの稱へ易く、行じ易い念佛によつて、そのまゝ救はれて行くといふ、上人の細々とした説法を聴いてゐる裡に、耳四郎の兩眼にはいつか悔悟と自責の涙が一杯に溜り、罪業の怖ろしさに硬直

した彼の全身は細かく震えてゐた。

悪人發得

彼は堪まらなくなつたやうに、素早く床下を抜け出ると、御房の正面へ走り出て、隨喜の涙にかき暮れながら、肅然として専心に御説法を聴聞してゐる幾百の人々の背後から、隠れるやうにして、椽先へ登り上つた。

水をうつたやうな一座を、靜かに高座の上から見下しながら、尙も説法を續けてゆく法然上人。五十がらみな、でつぶりとした、際立つて色の白い氣品のある溫顔、而も慈愛に潤んだ切れ長の眼は、何者も犯すことの出来ない崇高の輝きを見せて、墨染の麻衣に同じ袈裟を纏われた身は湛然と澄める聖者の想ひを如實に現はしてゐる。

上人は語を續けて、

「兆載の悲願は、そも誰れの爲ぞや。十方三世に救ひ手のない、毒惡深重の我等を救はんが爲めであるのぢや。超世の御修行、これ、何人の料ぞや、たゞ我等を救はん爲めの御苦勞であるのぢや。それをも知らずに無始以來、六道輪廻と迷ひ惑つた吾が身が情なくも淺間しいと察つたならば、ひたすらに、稱名を願ふゝが肝要ぢや。」
「ご、御坊様、儂でさへ、この罪深い儂でさへ、稱名によつて、救はれるでせうか！」

耳四郎は、感極つて聲をかけた。

人々は意外なダミ聲に驚いて振り返つた。

微風に明滅するほの暗い灯影を通して、椽端に蹲まつた世にも奇怪な大男を發見すると、男も女も、そツとして身を窄めた。

「御坊様！」

耳四郎は、伸び上るやうにして、もう一度聲をかけた。

「——儂でさへ、この耳四郎でさへ、救はれるでせうか？」

と、その言葉が終るか終らない裡に、人々はわッ！と喚聲を擧げながら、雪崩れをうつて本堂の一角へ我先にと逃げ合つた。

「耳四郎ぢや！」「攝津の鬼畜ぢや！」「近寄つて怪我するな！」

人々は喚き合つた。

意外な光景に自分自身呆氣にとられてゐた耳四郎も、慚くそれが自分に對する人々の恐怖であることを意識すると、たつたいま、救ひに生きやうとした氣持は、もう何處かへけし飛んで、日頃の卑屈な狂暴性がムラ／＼と炎のやうに、彼の五體に擴がつていつた。

「耳四郎は儂ぢや。それがどうした。」

山刀の柄を力一杯握り締めながら、彼は椽側に仁王立になつて、おらび立てた。

「——抜けば血を見ねば済まぬ刀ぢや。ど奴が良いか！ は、は、は、は……」彼は大聲に洪笑した。

一瞬、無氣味な沈黙が四圍を支配した。



と、先刻から高座の上で其の有様を擬乎と擬視てゐた上人は、靜かに立上つて人々を分けながら、怖れ氣もなく、歩み寄つて來た。

「耳四郎とやら、氣を靜められよ。」

和かな、それでゐて何者をも威壓するやうな御聲、

「う、う、う……ぼ、坊主奴が、何にを……」

強いて反抗しやうとして、威猛高になつた耳四郎も、一度、上人の面を仰ぎ見た時、慈眼の底に燦々と輝く、人の魂の秘奥まで射抜かずには於かないやうな鋭るどい眼光に射竦められて、思はずだじく／＼と、だじろがずにはいられなかつた。騎虎の勢に勿ね返えさうと焦れば焦る程彼の五感に閃光に打たれたやうな靈氣に痺れて次第に自由を失つてゆく許りだつた。

彼は繼て反抗する氣力も無くなつたやうに、どつかりと其場に膝を折つて、默念としてさしうつむいた。

「そなたこそ、儼が求めてゐた仁ぢや。……」

上人の口許は除ろにはころびた。

「——そなたには、まこと宿善開發の時期が到來したといふものぢや。喜ばしくも有難い限りではないか！ 彌陀の本願は、如何なる惡人も如何なる罪人も御目あてにいたしますのぢや。救はれ難いものこそ、救はんとする誓願不思議の願力なれば、無漏圓滿の尊號として六字の名號を成就し給ふたのぢや。耳四郎よ、罪深しとも怖れるなよ。障り多しとも悲しむな。たゞ、一念に疑はず惑はず稱念したがい。……」

一語、一語と説く上人の兩眼には、何時しか涙の露が宿つてゐた。耳四郎は意外だつた。未だ曾て他人からこんなにも親しく、こんなにも優しい手を差し延べられたことは無かつた。

ともすれば卑屈に反抗的になる彼の粗暴性も、何時とはなしに其の影を潜めて、たゞ理由もなく泣き叫ぶ赤兒が、優しき母の乳房を含ませられた時のやうに、和かで、安らかな氣持に解け込んで、眼に見えぬ不思議な力に、引づり込まれてゆくのを意識するのだつた。最早彼は見得も外聞も無く、無性に泣きたかつた。子供のやうに大聲に泣いてみたかつた。

耳四郎の膝の上には頬鬚を傳つた涙が、ボタ／＼と流れ落ちた。

「——耳四郎よ、そなたは救はれる。正しい心の持主ぢや。」

上人は懷中を探つて、小さな袱紗包を取り出し、巾から一寸許りの黄金造りの阿彌陀像を出して、敬々しくおし戴いたが、

「——儼が肌身離さず持つてゐた御佛像ぢや。そなたにこれを進ぜよう。心が平安でない時があつたなら、この御佛像を拜すがよい。」

上人は、耳四郎の大きな掌の上に優しく御佛像を載せた。

「ご、御坊様！」

耳四郎はもう何にも言へなかつた。御佛像を捧げたまゝ、縁側にひれ伏して、肩を激しく起伏させながら、慟哭し續けた。

感極つた人々の口には、いつしか南無阿彌陀佛が稱へられ、その聲は次第に熱を帯び、力を帯びて、清澄な靈坊の夜空に大きくこだました。(終)

信 仰 相 談

擔 當 中 村 辨 康

本欄への投稿は、ハガキまたは封書にて、住所氏名御明記の上、信仰相談係あてに送ること、紙上匿名は可。

悟りと信仰の對象

(問) 或る本に「我々佛教信者は自らを離れた究竟の彼方には信仰の對象を持たぬ。何故なら神と人との關係の如く隔絶した兩者ではないのであつて、我々は自由に佛になり得るのである。或ひは自己に佛を體得し得るのである。」と云ふことが書れてをりますが、すると、私達の信仰の對象たる阿彌陀如来様は如何言ふ事になるのでせうか。どうしても、もや／＼して解りません。(東京一信者)

(答) 十一月號念佛讀本の「生」「佛」「本願」「信」と行「念佛の意義」等を御讀み下されば御諒解が出来るかと存じます。信仰の

對象なき信仰と云ふ事實はありません。元と元と不穩なる海であつても風波のあるのを何うしますか。櫓を失つた捨小舟がよし燈臺の光を認め得ても目的地に達する事が出来ないのと同様です。其上に浪風の荒い人生の海です。然るに信仰の對象は大磁力の如きものです。こちらに其磁力に吸引される鐵分を含んだ要素が多分にあればたとへ櫓がなくても段々引きつけられて行くやうに、信仰があつて始めて彼岸へ到達することも出来るでせう。茲にどうしても信仰の對象が必要であります。そして鐵が磁力に接すると鐵其ものにも磁力が出来て來ると同様に、佛と衆生と

は全然性質の違つたものではありませんが、まだ磁力を得て居ない時は磁力へ近づける丈の行為は必要です。それが「南無」の心理です。

絶對の救ひと現在の諸惡

(答) 阿彌陀如来様は絶對の慈悲と絶對の智慧とを御具へなされ、既に十劫の昔にお悟りを御成就遊されて居りますのに、何故に我々愚痴の凡夫は苦しまねばならぬのでせう。現實の苦しみを味ふ時、何んだか如来様の絶對のお慈悲や智慧が疑はれてなりません。既に救はれてゐるならば、殊更に俗世間の諸惡の存在は否定さるべきですが、どう考へても惡の存在は事實ですし、如来の絶對他力が疑はれます。(佐賀 江馬春司)

(答) 親が子を思ふ慈愛は大き

な力として子供の上に加へられて居りますのに、自我の強い我儘な子供は、毛筋程もそれを受け入れず、勝手氣儘な事をして、自ら苦しんで居ると云ふ事はよくある事です。またいたづらの烈しい子供の癖を改めさせやうとして、父親が土藏の中に入れたとします。入れられた子供は「にくい親父だ」と大に父親を恨むかも知れませんが、親の慈愛は其土藏全體を包んで其子のよくならんことを念願して居る譯です。

お尋ねの問題は恰度此の子供の心と同じで、まだ親の慈愛に氣が付かずに居る時代の心境です。放逸な生活をして居る息子は、親の手許を飛び出してどんなに苦しみ惱んで居ても、親の慈愛は寸時も忘れる暇はありません。一層慈しみ悲しんで居り、尙更に今迄の生活

信 仰 相 談

状態を改めて一日も早く眞實生活をなし、安泰な氣持になつて呉れるやう念願して居るところとせう。それが「救はれて居る」と云ふ事なのですが、まだ救ひが現實的には完成されては居りません。ですから此方が此の救ひの心に氣付いて「嬉し」と感じます時、つまり彼此合體した時、始めて救ひと云ふ事實が現實化して私達の直觀に上つて來ます。それは電氣の陽極へ陰電子が合體した時、中和されるのと同理であり、此方が如來の方へ結び付いて行つて初めて救ひが完成されます。ですから私達に苦しみがあればある程如來の方へ傾倒する心を強くする筈で、疑ひが増すなど云ふ心境は、まだ本當に自分のいけない事に氣の付いて居ない我儘息子の心境であつて、お慈悲がちつとも判つて居ないと

云ふものです。

成佛の本義と諸佛の護念

(問) 人間が佛なのだ。煩惱はそのまゝが菩提であり、生死即涅槃、故に滅すべき煩惱もなく斷すべき生死もない。この明かな信念に立つて悠々として閑逸ならぬ行動をしてそれを實踐して行く生活に成佛の本義があるときれてゐると云ふことはどう云ふことを云つてゐるのですか。又信仰を得た者には諸佛が護念してゐると云ふことも解りません。私達の日常生活に則してお説き下さい。

(千葉 市原俊生)

(問) 煩惱即菩提と云ふ事、生死即涅槃と云ふ事をくわしく御教示被下度候、見老病死、悟世非常と云ふ事をわかりやすく御説明被下度候。

(奈良 指月生)

(答) 二問を一緒にして御答へ致します。煩惱とは私達の惑ひが結局私達に煩悶苦惱を與へるので、惑ひを其儘煩惱と云つたのです。隨て其煩悶苦惱から脱却しやうとする行動が當然起つて來ますが、目標がハツキリして居ないと、丁度泥田の中で藻掻いて居るやうに益々苦惱を増して行きます。然し其根本となつて居る惑を知つて、菩提即ち眼醒め(覺)を目標としますれば、直ぐ反省が行はれますから、煩惱は其儘菩提の因となります。之に反して若し煩惱することもなく極樂トンボでウカウカ暮して居る人があると假定しますと、反省と云ふことが起つて來ませんから、菩提への誘因が無い筈です。隨て煩惱も菩提も問題にはなりません。柿の澁が酸化すると其まゝ甘味

と變化するやうに煩惱があればこそ菩提への行進が出来る譯です。だから煩惱即菩提と云つたのです。「田の草を取りて其儘肥しかな」と云ふ文句もあるやうに、惡があればこそ善への向上が出来る譯で、因果關係の上からも、質の上からも同系の同質のものと見ることが出来るからです。其上菩提と云ふ覺めが少しでも體驗されますと、眞實の生命に氣が付きます。私達が一般に云つて居る生命は唯だ肉體存続の時間を云つたに過ぎません。が、其肉體が本當に生き働いて多少なりとも社會的價值を生み出した時、生命其ものに尊い價值があつた譯だから其時こそ生命が本當に生きたので、其瞬間丈でも一分の涅槃即ち永遠不滅の生命が輝いたと云へます。然し私達の生活はさう理

信 仰 相 談

想通りに行くものではありません。人から、無價値の状態云々は、無駄に生命が空費された死の状態が相当多いので、茲に反省がうながされて、是ではならぬもつと眞剣に生きやうと努めるやうになります。之を生死即涅槃と云ひます。其上私達の壽命即ち生き死は相對的のものであり隨て因果關係に依存して居るものだから、何うしたつて肉體的な死をまぬかれる事は出来ません。だからかうした肉體關係でない外の意味で永遠の生命を確認する必要があるから、其相對關係を絶したつまり存在觀念でない絶對的な意味の眞實の價値に不滅を求めると、其處に「無生の生」と云ふ悟りが出来て來まして、成佛と云ふ意味が菩提なり涅槃なりを求めて行く處に一分宛でも確認されて行きます。だから人

のみが佛になれるので、狗子に佛性ありと云ふも直ちには佛としての生活體驗は出来ない譯です。また此菩提を求め涅槃を體驗せんとすることに就て、何か其處に反省材料がなければ、さう云ふ氣持や願望が出て來ませんから、或は無常觀とか或は罪惡觀とか云ふ事が大きな役割をなすので、老病死と云ふやうな變化し行く無常觀だとか老病死の苦から脱がれやうとする氣持から菩提と云ふさとりや涅槃と云ふ不滅の價値への方向轉換が初まるのです。そして謂ゆる無常無我の理とそれから導かれた眞實生活とがよく判るから、其代表的な誘因たる老病死と正しい生活理論の根底となる常ならざる人世とを取り出して求道への道筋を簡単に云つたものが『見老病死

悟世非常』と云ふことです。尙ほ諸佛談念の事は四月號五月號の阿彌陀經講義の中で簡単に申して置きましたが、正信の保持者は正しい生活を營み、周圍を淨化する方が出て來ますから、天地全體からは認され保護されると云ふ事は理論的に見てもあり得ることと、諸佛諸菩薩は皆な此正義愛に燃えて居る人達であり、且つ皆な般舟三昧法即ち念彌陀法に依て成佛して居られるのだから、必ず、念彌陀法に依て正しき生活をしやうとする人達を護念して下さる筈であります。理の上からも情の上からも當然あるべき筈でありまして、敢へて釋尊が「諸佛が護念して居るぞ」と云とはれなくても信ずる者にはさうした直觀視も起つて來るものです。其處にまた信仰の強さも自覺されて愈々益々私達の日常生活が淨められても行きます。して見れば此の日常生活が幾分でも淨められて行くのが亦た諸佛護念の實證とも云ふべきで、かうした生活上の事實がハッキリ體驗されなければ、まだまだ私達の信仰は諸佛から護念されるまでに至つて居ないのだから、何處かに缺陷があり正しくないとあると反省して行かねばなりませんまい。

佛舍利の所在

(問) 日本の國にほんとうの釋迦牟尼佛の舍利が渡つてゐますやうか。若し佛舍利が有りますなれば何處とどこにあるか。委しく御知らせ下さい。

(福島 木村吉次郎)

(答) 舍利と云ふ事に就ては色々な意味もありますが、御尋ねの舍利は碎身舍利即ち佛の身

信 仰 相 談

骨の事と存じます。釋尊の舍利は八つに分骨されたさうですが、佛母般泥洹經には滅後二百年過ぎて、阿育王に依て其舍利を索ね求められ八萬四千の佛圖を作つた由を云つて居り、毘奈耶雜事と云ふ本には八分された内、七分は印度諸國に分けられ、一分がまた龍宮其他に分けられたとも云つて居ます。先年シヤム皇帝から分けられて日本に贈られたのは印度で分骨されたものの一つが發掘されたその一部だとの事です。各宗で名古屋の覺王山に日蓮寺を建て、奉安しました。また東京本所の震災記念堂にも二菩薩を通じて日本少年團にシヤムから贈られた佛舍利が奉安されて有ると云ふことです。今の處日本には此の二つでせう。一般にお舍利さまと云つて祭られてゐるのは、本當に釋尊の佛舍利であるか

何うかは直に斷言出来ません。

葬儀の時の帽子

(問) 中村先生、私の地方では淨土宗禪宗その他の宗派の葬式に於ても、その死者の近親縁者の女性又は近所の女性(共に大人)等がボーシと云つて白い布又は絹で造つた頭巾を冠つて墓地まで葬式の列に加つておりますが、之はどう云ふ理由で冠り始めたものでせうか。又之は全國的な習慣でありませうか、御尋ねします。

(防府 先村利吉)

(答) 古へは平生でも婦人は被衣と云ふものを被つて外出したものださうです。貞丈雜記と云ふ本に「古より女はよそへ出る時はかづきをするなり。今も京大阪などの女はかづきをする也。古のかづきは白きひとへの小袖なり。今は色々に

染て裏付きたるもあり、模様を染めたるもあり。昔は兩袖を頭の上に重ねて針にてさし置きたりと云ふ説もあれど、古も袖をさげてかつきたり。かつぎのたちぬい、常の小袖と替ることなし。唯だ糸形を前に下げて裁つなり。是は額へ深くかゝり顔をかす爲なり。江戸にては今のかづきすることなし。是は昔岩間八三郎と云ふ浪人十八歳なりしが松平伊豆守を恨る事ありて覗ひしが、かつきを着して近付き、女の眞似して伊豆守を討たんとせし事ありし故、關東にはかづきを禁せられしなり。之に依てぼろしなど云ふものを用ひ、若き女などは編笠をかぶりたりよし云云」とありますやうに、薄い白一重の小袖を被つたり、ぼろしと稱する綿又は布を被つた古い習慣が残つて居るもので、古

い歴史を持つて居るだけに、殆んど全國的に廣がつたものではないかと想像されます。東北地方の婦人は年齡に依て色の區別をした風呂敷見たいな布を始終被つて居り、平生用と他所行用と二種類調へられてあると云ふ如きは、此習慣の變化したものと見られます。葬儀の場合には人間四大儀禮の隨一として正式の服裝を必要とするから、徳川中世頃から殆んど被衣と云ふ事がすたれたにせよ、かうした儀式の時は特別に用ゐられたのでせうし、また一方には忌服と云ふ喪の意味も充分加つて來て、一般會葬者は兎に角近親丈は、喪に服すると云ふ表示として、また一つには悲しい顔をかゝすと云ふ禮儀の上からも、古い習慣が保存されて行つたのではないかと想像します。



美 聲

聲 の 精 進

生 田 花 世

ふ、
四五年前の事であつたと思

「AK」で、「秋の思出」といふ
話を二十分した事のあつた時、
私のところへ次のやうな廣告の
手紙が舞ひこんだ。

「あなたの肉聲を一度レコード
に吹込んで御覧なさい。永久の
楽しみです」

これを讀んで、私は、商人の
拔目のない勧誘におどろくと同
時に、終りの文句の「永久の樂
しみです」といふのに、ちつと
も同感しない氣持を自覺した事
だつた。

「それが楽しいとは思はれな
い」

かう私は、自分の耳にさゝや
いた。

きまりがわるいと思はれも
し、可笑しいやうにも思はれ、

又、苦しくも豫想される氣持が
した。つまり、鏡で、自分の、
美しくない顔を見るやうな……
見たつて始まらないと思へた
のだつた。

其後、四五年たつてゐるが、
どうもまだ、自分の聲が楽しい
と思へさうなそんな、氣分は出
來てゐない。やはり、工合のわ
るい氣持がするのである。

自分のお臍でも見るやうな……

ことによつたら、一生、さう
思つてしまひさうで、レコード
會社に、金儲けさせてやれさう
にもない私だ。

つまり、私は、自分の聲につ
いて、美しいとか、愛らしいか
らうとかの自信がない、自信が
ないから、誇りもないし、享樂
もない次第である。死後にまで
のこして、人にきいてもらふと
いふ考へも毛頭ない。これは、
一人の子供もない女としての、
ニヒルなものかも知れないが……

従つて、いはば、私は、かう
いふ點でも不幸である。して、
かうした私が、次の和歌をふと
よんだ時、何ともいへぬシヨツ
クを感じた。これは、一代の佳
人、九條武子夫人のお作なので

わが聲のいと美しい

きこゆなり

山ふところの秋草の原

つつましいこの佳人は、無條

件に、私は美聲だとうぬぼれて

あるわけでない。その美しい理

由を、「山ふところの秋草の原」

の空氣のせいにしてゐる、もし

くば、秋そのものの優美な、清

澄なバツクのせいにもしてゐ

る。だが、美しく聞えるその自

分の聲にほれ／＼する事が出来

たといふのは、何といつても、

御自身の聲がいいからの事であ

る。又いやでないからの事であ

る。

隨筆

私の聲など

秋草の原であ

らうが、春草

の丘であらうが、「美しい聲」だ

と、自分でうれしく思へるたぐ

みではない。つとめて自分の事

をわろく云つて見たい卑劣誇大

癖からこんなに云ふわけではな

い。これは、事實を事實として

考へ、自覺するまでの事だ。

私の聲を美しくしてくれさう

な山も野も海も、この世にあり

さうでない。その點は、私もあ

きらめてゐる。

やさしい聲

そんなに「美」に遠く、少し

の自信も満足も持てない私なの

だが、私は、自分の聲を「やさ

しい聲」だといふ事は、はつき

りいへるのだ。

わが聲のいと優しくぞ響くな

る

うなだれてある處女心へ

私の和歌はまづ、こんな風に

なる。(和歌としてはなつてゐな

いとしても……)

私の聲が、やさしいといふ事

については私の友人の十人の中

七八人まで、あるひは十人まで、

さうですよといつてくれさうで

ある。子供のない私が、どうし

て、そんな優しい聲なごやかな

愛情の聲をもつだらう、どうせ

寂しい女なのだから、尖つた、

すさんだ、冷たい聲をもつたら

うものをと、一寸、私を知らな

い人は、まごつくだらうと思ふ。

私は、あけすけに説明するが、

私の聲のやさしいのは、私が、

母性愛の對象がないからの事だ

と思へるのだ。もともと子煩悩

で、母性型なのに、後天的理由

で、子供を與へられてゐない。

そこで、身の近くのもの、又出

逢ふかぎりの人々に、その愛を

さゝげつくさうとするのだ。だ

から、母らしい情緒が、やさし

い聲をえらぶのだらうと思へる

のだ。

美貌だともいへない、美聲だ

ともいへない、だから、私に、

初対面の人が、私に、この間の

禮を申しのべる手紙に、きまつ

てかくのは「おやさしいお聲を

今もしのんでゐます」とか、「お

母さんの聲をきいたやうな気が

しました」とかいふ文句を入れ

てある事だ。幾通もかういふ手

紙をもらつてゐるので、まんざ

ら、根も葉もない事だとはいへ

ないと思つてゐる。

もう一つ、私の聲が、やさしい理由は、私の生れた國のローカルカラアのせいでもある。

私は、阿波(徳島縣)の國の山裾の村に生れた女だが、その土地一體の方言なり、アクセントなりが、とてもものんびりしたもののなのである。

あの故郷では、繼子をいぢめちらす繼母でも、嫁につよい姑でも小姑をにくむ嫁でも、いざ、その聲は、みんなのんびりとしてゐて、平和的で、やさしげなのである。

『まア、お前はん、もう御寢なはれ』

そんな風にいふ。

『めんめらア(自分達といふ事)かなやしまへんでわア……』

そんなにいふ。

『ちつたあ、わかつたでかい。いたい目にあつたあちうから……』

そよそよと吹く春の野の風の音、ちよろちよろと流れる秋の谷水の音、そんなリズムを故郷のアクセントはもち、それが、私を育てたので、いつしか私も、鋭い事を、なごやかにいふやうになつた。つまり、期せずして、私は、ロウクワイな女になつた次第である。だから、私の優しい聲には、やはり、ほだされて下さるなである。

聲の精進

といふと——私は、よほど悪人らしいが素質の上の悪の要素はそんなにない。たゞ怒り、か

なしみの表現が、のんびりしてゐるといふ位の事で、腹黒く工作してまで、人に一杯くはせようといふやうな、手のこんだねばりづよい點が缺けてゐる。だから「やはり、詩人ですね」なんかと云はれる。小説家になりたくもあり、その修業も長年してゐるのだが、テンペラメントの上で、どうもまだまだ、作家的悪質——えぐりこむ力をもつといふところまでいつてゐないのだ。

自分の性格が、もつと、作家的悪質をへへんな云ひ方だが、つまりえぐいところもつて來たなら、私の聲も、もつと變化して來るのであらう。私は、自分の聲が、變化する位自分の性格改造をしたいと思ふものだ

が、これは、なかなかむづかりさうだ。

野菊の花片の一つだつて、神ゆるしたまはずば、長くも短くもならない、見られるままのもので、咲いて散るだけだ。たゞ、優しいだけが、いいわけでない。

その優しさは、理智を持たねばならない、それが、まだく私には、缺けてゐるのであるから、これから一生の修業が、必要だといふ事はわかる。

最後に、私は、いつからか、大きい聲が出る女となつた。

歌聲は、少女時代に、ノドの破れきるまでの修業もせず、血のせいもあつて、調子はづれなのだから、リズムの上で妙味はないが、實用的に、相當、大聲

が出る。

今年の春、佐世保で、その市の公會堂で中立の某氏の代議士選挙の應援をした時、

『私は、みんなを一寸おどろかす女のやうであります。一つは、身體が小さいので……もう一つは、こんなに小さいのに、聲が大きい事で……』

とのべたら、満場の人々が、愉快さうに笑った事だった。

私は、演壇の聲の稽古を、臺灣の七つの都の七つの演壇で十二年前におけいこしたのだった。だん／＼に、私は、おちついて、そして、よく徹る聲になった。歸りに、朝日丸のデッキで、私たちをつれて行つた

隨筆

山田やす子

史がかう云つた事のあるのを思ひ出す。

『それで、發聲法を、一とほり御勉強なさると、もう申し分ありませんねえ』

山田女史は、云ふまでもなく、その發聲法を勉強してゐる人だった。私も發聲法でもならひ、もつと、修業したら、あるひは、他日美しい自分の聲の自覺をつかみ得るのではないだらうか。

私の見聞では、これまで逢つた名僧と偉人は、總じて、底光りのする聲よく響く聲音吐朗々の聲の持主だった。男でも、女でも、えらいのは、聲までえらい事だった。

私の聲の玲瓏でない事は、この點仕方がない。偉くないのだから。

だが、あこがれとしては、自分の聲に、父を宿し、母を宿し、郷里を代表し、更にすゝんでは、神の心、佛の心を、些少たりとも現したい。そんな風に、大きく、廣く、明るく、美しく訓練精進していつてみたい。

聲の修養は、生涯、つんで行

きたいものだ。
あの世のレコードに私の「南無阿彌陀佛」を吹きこむため、しづかに旅立てる日の来るまで――。

味覺の法悦境



ドーヨー 然天性機有

ヨーードの素は

天然に多量のヨーードを含み有害なノリ分がなく湯水に良く溶けます

用ひ度い方

肥り過ぎ、高血壓、お産前後の臭様方、顔色の良くない方、風を引き易いお方

進サンプル

發賣元東京本郷二丁目

大日本水産工業株式會社

卓效藥

ブレインは

血液を清淨にし骨格と神經を強化する強力ヨーード有機性劑
効能
動脈硬化、中風、腺病、授乳婦の燐カルシウム不足



業職と信仰

安心して商ひの出来る

念佛信仰の店を見る

…本誌記者…

南無阿彌陀
佛を書く

め家族の者は勿論、どんな小さな店員に至るまでも、すべてが念佛によつて一致和合されてゐることである。

今から五年前、新しい佛壇が家の奥の間に設けられた。それを記念として、主人は五帳綴程の禮拜簿を作り、一家中の者達に南無阿

東京市下谷區西町に島田時計店といふ貴金屬商がある。主人の島田辰蔵氏は今年四十五歳の働き盛り、鐵道省の御用商を承はつて、現在二十三名の店員を有する繁昌振りでである。その上主人夫妻は四人の子福者で、一家は年中春光に包まれたやうな和氣藹々の空氣に暮してゐる。——かう云つただけでは世間に他の例がいくらもあらうが、しかしこの一家の家憲となつてゐるものに、他に求めて得られない奇特な行事がある。それは主人を始



島田辰蔵氏

彌陀佛の名號を毎日記すやうに命じた。つまり、朝、各々が夫々の生活に就くまへに佛前で念佛を唱へることにはなつてゐたが、それだけではどうも不足感が伴ふといふので、唱へた者は必ず名號を一つ宛禮拜簿に記入するのである。一家と云つても、家族や店員の間では佛前禮拜の時間も區々になるので、記載した名號の下には、その姓名と記した時間とを書添へる。漢字を書けぬ幼年者は片假名、平假名何で書いても差支へない。その毎朝の南無阿彌陀佛が積り積つて、今では禮拜簿が第八冊目の中程にまですゝんでゐる。嗚呼、どんな高僧の筆になる名號も及ばぬ純眞な珠玉のその集積！半生の苦闘を戦

ひ抜いて、今日の島田商店の存在を形づくつた主人辰蔵氏が、このやうな家憲を作つて、佛教の所謂「同入和合海」の生活、すなはち一家の人々が文字通り一如になつて、いついかなる時も感謝奉仕の念をもつた生活を忘れないと云ふことには、遠い少年時代に心の奥底まで喰ひこんだ「佛の慈悲」の信念が些かも揺がずにゐるからである。

發奮した師の一言

島田家は代々南千住淨閑寺の檀徒であつ

た。話は明治四十年代の昔に遡る。淨閑寺經營の佛教少年耕學會（三輪慈光學園前身）の少年教會の會員として、日曜日毎に元氣な姿を會に見せる少年があつた。この少年は動作が機敏で、少しも高ぶるところなく教員達の教へをよく守るので、會全體から愛されてゐた。が、何よりその性質の素直さを見込んで、一入この少年の教化に興味を持つたのは、當寺宗教大學に通學の傍ら會の手傳ひをしてゐた戸松學瑛師であつた。

「人間はどんな境遇に置かれても、まじめに



信 仰 の 店 ・ 島 田 時 計 店

自己の本分を盡してさへみれば、きつと佛様のお慈悲に浴して明るい生涯を送ることが出来る。自分が至らないと思つたら、決して不服の心を生さないで佛様の前に掌を合せ、お念佛を唱へなさい。」かうした教へが、まだ何も知らない少年の魂にしつかり沁み亘つた。従つて、少年の戸松師に對する信頼は殆ど親子關係に等しいものとなつて行つた。後年成長した少年の結婚の世話、その他各方面の面倒、力づけに、師が當るやうになつた因縁はその頃にあつたのだ。少年の名は島田辰蔵、家は下谷金杉にあつて米商を営んでゐた。然し、小學校を卒へると、この少年の姿はぼつたり耕學會に見えぬやうになつた。芝島森で眼鏡商を営んでゐた叔父の許に年期奉公にやられたからである。それは一つには、商人には學問は要らぬといふ父親の意見に随つたわけであるが、また一つには不運続きで左前になつた家庭の事情にも由つたのである。少年辰蔵は然し新しい職を覺えるために一心不乱に努力精進した。そして年期が明けて軍

隊生活に入り、下谷の實家に戻つて來ると間もなく、苦境のどん底で父を失つたのである。が、彼は少しも失望しなかつた。眞面目に働きた教へがまざまざと彼の腦裏に泛んで來た。淋しくなれば恩師を訪れ、激勵の言に振ひ立つて、働いた、働いた。老いた母親と弟妹をいたはりながら、夜の目も寝ずに頑張つた。時計職、つづいて結婚と同時に小さいながらの時計店を持ち得るやうになるまで……。

西町に現在の島田商店の看板を掲げたのは、關東大震災火災の直後であつた。

時は命なり

記者は一日、島田商店を訪れて當の主人と親しく歓談した。佛間に通されて、有難さのあふれてゐる奇特の禮拜簿を一枚々々ひらき見してゐると、ふつと主人は壁にかけられた戸松師書の「時は命なり」の扁額を指され、「あれは私にとつて大切な記念です。」と云はれた。——十數年前、恩師への禮心にその住



ノーシンのいいところは服む……スツと痛みが消える同時に、頭の疲れを恢復する……この二つです。而かも胃腸等には勿論、安全で、連用すれば頭腦ばかりか、心臓迄も強補する効果あり。これでこそ完成せる模範的頭腦藥と稱せられる所以！

頭の痛みと疲れに



三錢・五錢・一圓・二圓

職寺之赤羽の心光院に等身大の掛時計を贈つたときの返禮ださうである。「時は命なり」この言葉によつて、主人はそれまでの西洋流の「時は金」の考へをすつかり捨て去り、せめて「時計報國」のため、壽命無量の信念にあやかつて、壽命の永いよい時計を賣らなければならぬ、と、ハツとこの點に氣づかれたとのことである。

お互に慈しみ合つて念佛の店に同入和合するころ——主人はこの心のあらはれを素直に記者に語つてくれた。

一、毎朝の行事（念佛を唱へ、名號を記すこと）をしてゐると、安心して商ひが出来る。

一、段々悪いことが出来なくなる。（すまないといふ念が始終働くから）

一、商賣だから儲けもするが、良品を出来るだけ廉賣するやうな結果になり、信用が増して来る。

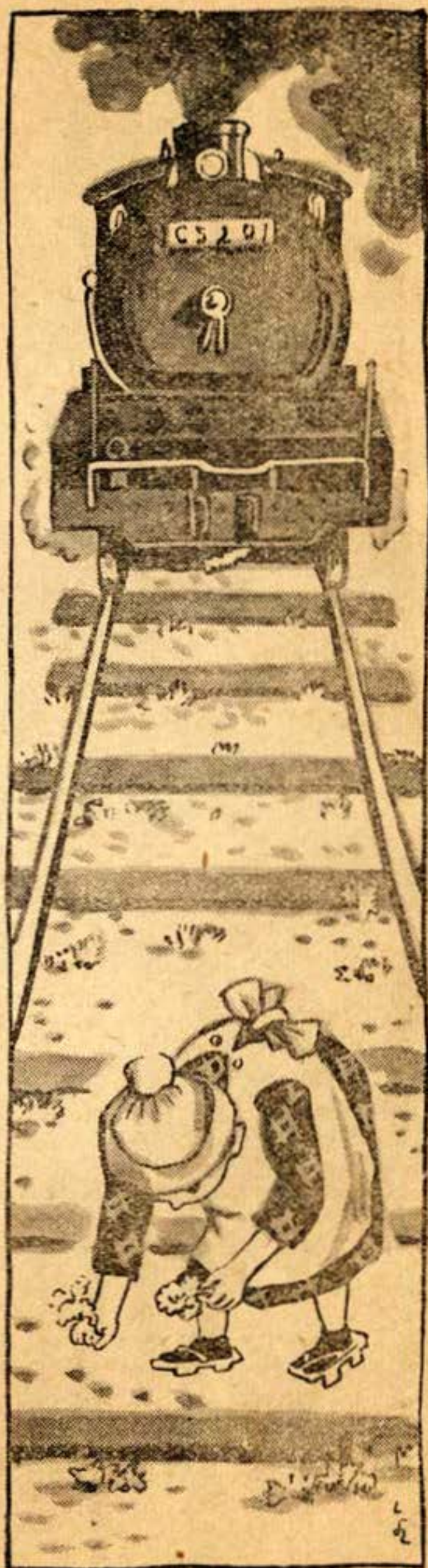
一、他に店持ちとなつた店員が、自家の行事を眞似てみな仕合せに暮せると云つて来る。（了）

子供のため

ヒガミを捨て明るく生きる

(實話)

菊地謙雄作
鈴木金平畫



春、野も山も蘇へり、人の心も伸び
伸びと、明るい春が来ました。

今年六つになつた中山龜太郎君は、
姉さんと近所のお友達と蓬草摘みに出
掛けました。ポカ／＼と暖かい日射し
を受けてほんとに嬉しさうです。

九州小倉の町はづれ、汽車の線路堤
には草摘の人達で一杯です。

「春風ほろ／＼」

こすゑがゆれる
ゆれる こすゑに
木の芽がみえる」

姉ちゃんの手をつないで、五六人の
お友達と足音も軽く、龜ちゃんは、人
の群の中へ進んで行きました。

「ア、澤山あるワ、龜ちゃん、うん
と摘んでお母さんに、お餅こしらへて
もらはうネ」

「ウン、僕摘むよ、」

白いエプロンの端をつまんで
軟い草をふんで、小さい手に
蓬草を摘み始めました。エプロ
ンの中はだん／＼ふくらんで來
る。龜ちゃんの頬も眞赤に上氣
してゐます。

夢中に摘んでゐる。二本の線
路の間にも軟かさうな、いゝ蓬
草が澤山生えてゐる。

龜ちゃんは、だん／＼線路の
間を進んで行きます。

アツ、その時、ゴウンといふ
汽車の響が聞えました。龜ちゃ
んは驚いて線路をまたいで逃げ
ようとした。

然し、その時、新しい龜ちゃ
んの下駄が、お母さんが貧しい
中を買つて下すつた心づくしの
新しい下駄が、汽車の線路には



さまつて、龜ちゃんは大ッタリ
たほれました。

お家の貧しい事も、お母さん
の心づくしも、六つの龜ちゃん
はよく知つてゐます。

下駄が、汽車にひかれる！

大事な下駄が！ 夢中になつて
鼻尾に手を掛けた、足を線路に
きかせて力をこめて引張つた。

その瞬間！

汽車は、氣ちがひじみた警笛
をあげてギイ／＼と止つた。龜ち
やんの居た場所を過ぎて……。

運轉手はとび降りる、草摘み
の人々は駆けつける。

「龜ちゃんがひかれた、龜ちゃ
んがひかれた。」

姉さんの泣聲、人々の叫び聲
がしばらく續いて、そのまゝ龜
ちゃんは病院へかつぎこまれま

した。

お母さんが駆けつけた時は、龜ちゃんはい白いベッドに眼をとちて院長先生や看護婦に看まもられてゐます。

「龜太郎！」

と、お母さんは夢中になつてベッドに走りまわした。毛布の片隅をめぐつた。

「アッ、龜太郎、左の手が！」

尙毛布をめぐつた。右の手も無惨にやられてゐます。まかれた繻帯を眞赤にそめてゐます。齒をくひしばつて、みつめてゐるお母さんは更に／＼毛布をめぐつて行きました。アアなんといふ事でせう。

左足も、繻帯を眞赤にそめて、短かくつゝまれてゐます。

氣強なお母さんですも、なんでこれに絶えられませう。みる／＼顔青さめて其場に倒れてしまひました。

かうした龜太郎は右脚一本の痛々しい姿となつてしまひました。

龜ちゃんのお父さんは秋田縣の椿銀山の探礦助手を勤めてゐましたがメタン瓦斯の大爆發の時、坑内に飛び込み坑夫を救つてゐる中に後瓦斯の爆發でなくなりました。

お母さんと姉さんと三人暮し、生活の樂な筈がありません。

銀山で貰つた弔慰金も龜ちゃんの三箇月の入院で無一物になりました。

お母さんは島根縣の大森といふ銅山に居るお母さんの姉さんを頼つて男鐵夫と一緒になつて鑛石割りの荒仕事に従事しました。

女と共に女の仕事をしておてはとも親子三人食べて行く事が出来ないからです。

夕方おそくかへつたお母さんは龜ちゃんを背負つて、それも龜ちゃんには

肩にかけさす手もない、腰をはさむ足もありません。

小さな柳行李を腰に結び、その上に一本足の龜ちゃんを載せて、町に出で山に遊び、色々なものを見せて歩きまわした。

他の子供の知つてゐるものは、何でも見せて、教へました。

八つになつた龜ちゃんは學校に入れようとなりましたが、特別教育を施すべきであるといふわけでことわられました。

それからといふものは龜ちゃんは、明けても暮れても、
「坊も學校へ行きたい、坊も學校へ行きたい」

と、お母さんを困らせたものです。一日の勞れを休める暇もなく、お母さんは、積み重ねた蒲團に寄りかゝつた龜ちゃんの前に座つて字を教へるので



す。
「母ちゃん、マツチの棒を折つておくれ」
と、五分位に折られたマツチの棒を龜ちゃんに口にくわへては字の形に並べるのです。
「母ちゃん、アといふ字が出来たよ。ネ、今度はイだらう。」
と次々にアイウエオを並べて行く不自由な龜ちゃんを、眺めて、お母さんは何度顔をそむけて泣いた事でせう。
然し、お母さんは龜ちゃんを、ヒガミのない子、明るい子

に育てるにどんなに頭を悩ました事でせう。
「心配する心で佛様を拜ませう」
これが、お母さんの常日頃の心構へです。金の杖をつけば曲ります。竹や木は折れませう。然し佛様におすがりすれば曲りも折れもしません。
お蔭と龜ちゃんは、強い、明るい子供として育ちました。佛様に手を合す子供になりました。
更に嬉しい事は龜ちゃんが十歳になった時、中庄小學校に新しく江口市太郎先生が校長になられ、龜ちゃんを二學年に編入して下さいました。憧れの學校、待ちに待った學校、龜ちゃんの喜び、お母さんの満足はどんなだつたでせう。床に入つても仲々眠れません。
新しい本、お母さんの手縫のカバン、お帽子、まくらもとに並べてあります。「坊、明日から學校だ。お唱歌だつて

うまいよ。

「春風 ほろ／＼」

小路に はしる

はしる小路に 草の芽出てる。」

大騒ぎです。大喜びです。

學校に出た龜ちゃん、やる／＼う

んと勉強をやつた。どん／＼出来るや

うになりました。

足の指に筆を鉛筆を挟んでかく習字

も圖畫も優等です。小刀で細工物もす

る。少しも不自由なしに他の子供達と

共に勉強しました。

然し、龜ちゃんの苦しみはどんなだ

つたでせう。何度でも出来るまでやる

のが龜ちゃんの尊い力です。

雨のふる日でも雨傘の柄を頸の襟の

中へさし込んで、中身の無い兩筒袖を

ブラ／＼させながら里見川堤を

雨々 ふれ／＼母さんが

ちやの目でお迎へ嬉しうな

ピッチ／＼ チャップ／＼

ラン／＼／＼

元氣よく歸つて来る龜ちゃんです。

桐の木で、つくつた義足で松葉杖を

つかないで元氣です。ホントに朗らか

です。

二三の學友達と里見川に釣糸を垂れ

る龜ちゃんも度々見ましたし、手ばな

しの自轉車に乗つてゐる龜ちゃんの姿

も何度見た事でせう。苦しい中を子供

だけはのび／＼と自由に他の子供と同

じ様に、なんでもやらせたお母さんで

す。

人並以上の努力の中にスク／＼と龜

ちゃんは育ちました。たうとう學校も

見事一番で卒業し「中山龜太郎保護會」

の力で中學まで卒業させて頂きました。

た。

それから龜太郎君は東京へ出て働き

ながら東洋大學の専門部に入り倫理學

と教育學を専攻し、遂に昭和六年三月

そこを卒業して昭和八年には中等教員

の免許狀を頂きました。兩手のない、

左足のない龜太郎さんはたうとう立派

に中學の先生の資格をとつたのです。

今ではほんとに幸福にお母さんと暮し

て居られます。

龜太郎さんはいつでも私の身體が完

全であつたら、お父さんの様に鑛山で

働いてゐたかも知れない。片輪になつ

た事は不幸ではあるが、そのために高

い教育も受け、佛様を拜むことも、覺

え、心を磨くことが出来ました。

人並の事は何でも出来る。「私はほん

とに幸福です」と誰にも言ふ事が出来

ます。と、

これが龜太郎さんの口癖です。

ヒガミを知らない龜太郎さんは明る

い悦びの生活を續けてゐます。

(をはり)

名將の
信仰

中國の雄將

元就公の信仰

三 谷 忍 暉

何事も基く處は遠く、そして深い。

中國の雄である毛利元就公は、最も純粹な念佛の信奉者であつた。

それは子孫に遺された家訓八箇條を見れば誰も疑ふことの出来ない事實であつて、今尙ほ舊徳山藩主毛利子爵家に秘藏せられて居るものである。

中國に覇をとなへ、豊臣徳川の偉大なる兵力權力智力を以てしても、之を何うすること

も出來ず、外様大名の中でも島津前田と共に最も大きな勢力であり、且つ明治維新に際しても、大きな功勳をなさしめたが、其内に込められた信仰の感化が、如何に毛利家を發展せしめ、その基礎を鞏固ならしめたかを知ら

ねばならぬのである。

一體毛利氏は遠祖を大江氏とする。

大江氏は菅原氏と共に文學を以て朝廷に仕へた家柄で、代々學政を掌つて居たのであつた。

其中でも大江匡房は實に博學であり、佛教にも精通し、念佛の實踐者であつた。即ち續日本往生傳の著者匡房のものしたものである。

また兵學にも長じて居た事は彼の源義家が匡房に就て兵法を學んだと云ふ有名な話でも判る事である。

藤原頼通が宇治の平等院を創立して、其山門を建てようとした時、何うしても北向に作

らねばならぬが、北向の三門は類例がないから少し困るが、さればと云つて地勢上外に方法もないので、何うしたらよからうと評定したけれども果しがつかない。そこで大江匡房に尋ねようと云ふことになつて、先例ありや否やを調べて貰ふことになつた。

すると匡房は即座に、天竺では那蘭陀寺、支那では、西明寺、日本では六波羅寺の三門は何れも北向であると答へたので、其の博覽強記に人々を驚かしたと云ふ話もある位である。

尤も惠心僧都が往生要集を著してから、凡三百年位後の人であるから、それらの感化で念佛の信仰を得て居られた事でもあらうかと想像せられる。

匡房に次いで有名な人は、大江廣元である。廣元は申すまでもなく、源頼朝を佐けて其大きな覇業を成さしめた大軍學者大兵學者であるが、のちに入道して覺阿彌陀佛と號した程の念佛信者であり、法然上人の開かれた淨土教の有力な支持者でもある。隨て其子で

ある左近衛將監從五位藏人大江季光は、上洛して淨土の御のりを信奉し、隆寛律師とは特に親交も深く、律師が謂ゆる嘉祿の法難と稱する専修念佛大迫害の卷添へを食つて、奥州へ流罪となつた時、自ら請うて、律師を伴ひ律師の弟子實成房を代人として流刑地に赴かしめ、律師をば自分の領地である相模飯山の毛利庄に居らしめて、朝夕の供養は勿論、淨土教の奥旨を學び、熱心な念佛行者として一生を飾つたのでも其半面を覗ひ知る事が出来やう。即ち勅修御傳にも出て居る森入道西阿と云ふ人は、この季光のことである。

この森入道季光から十一代の孫が、中國の覇者毛利元就公である。安藝吉田の一萬石の地から起つて、山陰山陽十餘州の太守となつたのも、其基くところは遠く先祖から流れて來た血の中に、高い清らかな宗教的信念が籠められて居たからであつた。

中國での大豪族たる吉川家小早川家などを其旗下に従へたのも、又血をぬらずして平和の中に精神的結合をなし、遂に一族と化せ

しめたのであり、天文二十年に大内義隆が其臣陶晴賢に弑せられて其遺託を受けた時、之を私の戦とせず、先づ朝廷に上奏して御裁可を仰ぎ、而してのち勅諭に依て討伐の軍を起したことの如き、或は吉田の郡山城を築くとき、從來の人柱を立てる迷信を打破して「百萬一心」の文字を石に彫つて、人柱の代りとしたことの如き、何れも佛教の本義たる「和」を以て中心として居たことは、かの有名な臨終に諸子を集めて東矢の教訓をした話と共に、何處までも僧伽の精神に立て居られたものである事を知り得るのである。

しかも其裏に指導原理となつて居たものは念佛の信仰であつた。

それは公が六十四歳の時、即ち永祿四年十一月二十五日（月は違ふが法然上人の命日である）に家訓を作つて子孫の遵守すべき要項八ヶ條を示した最後の結び、即ち第八條の文句を見れば、極めて明瞭なことである。即ち

「我等十一歳土居に居る日、念佛の大事を授かり、當年の今に至るまで怠りたる事な

し。無量壽佛に歸命し、無上功德の御名を稱ふれば、後生の儀は申すに及ばず、おのづから今生の祈禱にも相成候事と承はる。實に一念彌陀佛即滅無量罪乃至十念の謂れ、子孫に傳へて必ず御疑あるまじく之我が存念に候。かく申置候事、本望これに過ぐべからず。かへすくめで度候穴賢」とある。

つまり、十一歳の幼少の時代から一生涯念佛を實行して居て誤りなかつた事、及び現在生活の指導原理として（即ち生活の祈りとして）完全であること。并に子孫永々に傳へて無窮の發展に資すべきものであることの三點を云つたものであるが、それ丈で完全に公の信仰の凡てを盡して居る事を知ると同時に、如何に公の信仰が強く正しいものであつたかを想像し得る、有力な資料でもある。

毛利家の今日をなして居るのは、決して偶然ではない。何事でも其基く處は遠くそして深いことが此の一つでも明らかであらうと信ずる。

短歌

與謝野晶子選

一等 廣島 柴田 福三

つつましくよき言葉もて我家を
花園のごとつちかへる妻

(評) 内容と形式がしつくりと合つて
嬉しい作であると思ひましたが、猶そ
れ以上に中味の方の勝つてゐることを
次いで思ひました。

二等 福島 朝日 蝶子

わが閨も藥積む土間も庭先も雨
夜のごとし蟲の音の降る

(評) 農家の秋の夜に斯く感じた敏感
な婦人をたいへます。

三等 京都 松尾 慈海

たそがれに月見草咲く野を行け
ば月を慕ひて歩めるごとし

(評) これもよい歌です。新味があり
ます。月光をめぐりて行くやうである
と云ふのが誰れも云はなかつたことだ
からです。

岩手 藤原貞二郎

病み臥せば過去も未來も遠くし
て苦しき今を思ふひたすら

滋賀 本間 秀道

天つちのありのまにまにしたが
ひて稱名しつづ我れは行かまし

徳島 神原 梅

喜びもはた悲しみもつくづく
思へばすべて尊かりけり

廣島 上原 抱地

うら枯れてさびしくなれる茄子
の葉をゆりて過ぎ行く秋の夕風

大阪 前中 雁溪

はらからに離れ親なき我れなれ
ばみ佛をのみたのみてぞ行く

滋賀 郁芳 隨潤

まだ去らぬ暑さに我れは苦しめ
ど御寺秋なり紅芙蓉咲く

東京 小泉 妙春

うき事に堪へて行かんと香たけ
ば亡き面影の煙にぞ浮く

和歌山 奥村 映水

淨らかに眠れる君を弔ひて野を

歸る時寂し蟲啼く

大阪 小山 文二

園の上飛行機過ぎて静けさの戻
れば散りぬ木犀の花

兵庫 西島 春人

颯風がやがて來べしと書かれた
る新聞を吹く生ぬるき風

岐阜 阜 奥村 靖雄

しづかなる喜びありぬ信じつゝ
日日の葉をばわれの願めば

香川 横江 史枝

秋の山栗の實落つる音澄みて眞
晝の一時静かなるかな

長野 中山 弘

いちはやく秋を知らせて桐の葉
の散れば病む身の思ひ加はる

秋田 關 百合子

まどかなるみ佛仰ぎ念ずればた
だなつかしき心のみ湧く

桐生 横山 須賀

庭の木に百舌の鋭く高く啼き日
和つづきて秋の更け行く

北海道 押野 尙秀

穗芒の風に靡ける中にゐて我の
心も野の草に似る

神奈川 眞島 梅作

秋晴れて里にも菊の咲きにけり
笠に添へ行く農夫等の妻

長野 下平 武志

みまかりし友のおくつきぬかづ
けば松の雫のうなじにぞ散る

東京 石原 惲堂

夕日さす天草薙に帆船むれ歸り
來るなり高波を踏み

静岡 岡 一向 山人

愛鷹の麓の庵に住みなれて今は
歎かじ物も思はず

山形 河村龍太郎

夕月は山を出づらし海棠の窓に
影をば黒く置くなり

北海道 花田 順往

雨風よわが大君がみ軍をすべさ
せ給ふ野には荒るるな

山梨 伊藤 久次

數尺を出でざる若き柿の木に枝
もたわわに青き實のつく

久留米 中村 ツナ

人の罪はかるばかりの世なりせ
ば我れ如何にして人前に出ん
(和歌・俳句投稿は官製ハガキ
一回三首以内)

俳壇

大田耳動子



東京 古賀 光利
大いなる秋の来りし藺かな

東京 寶田 砂川

十三夜明るきものは陰もちて

東京 小山白郎子

木の實降る音のしきりにほづみあり

東京 太田 鹿浪

コンクリートの堤に垂れて草紅葉

鶴見 早山青葉城

芋虫の振袖ほしき願かな

東京 平松 白圭

はたはたのアスバラガスにおぼれをり

東京 太田のぶ江

つまさきに落葉をふみぬ晝の月

東京 富澤 逸卿

霧濃ゆし森の眠をとるそなた

東京 古市告天子

門限の大佛殿の鹿の子かな

東京 兒玉 鷹二
遊船に發砲信號揚りたる

東京 小野 三穂

スクリユーの水沫の音や月の暈

西ノ宮 越野 孤舟

群鷄の中へ撒きたる蝗かな

宮城 豊茂 月巴

涼しさは園の葡萄にこもるなり

青森 工藤 汀醉

颪風のあとの微風や秋櫻

青森 七戸 木賊

車庫前やガソリン光り秋の雨

神奈川 岸 弘竹

秋風に線かわきて枝蛙

群馬 馬 松本 龍翠

トランクに掛けて涼しや船を待つ

青梅 間宮一肇子

霧の山くだりて驛の裏にかな

東京 益田 五風
柿賣のうしろの園や星祭り

茨城 江田 飄逸

竹の枝ぼん／＼舐ねて竹屋哉

青森 鴨 澤昇

霧深き夜をまもりみる歩哨かな

大鵬 相馬 照子

日曜となりて一日冬仕度

東京 田中 静子

後の月窓のうちより眺めけり

兵庫 楠田 英子

秋の夜を梟の聲ちか／＼と

東京 江森 青蘭

瀧壺をおぼろにさはめ霧時雨

神奈川 岸 朗子

秋愁の二人となれば消えにけり

大磯 豊田天恵女

秋晴や猛ゆるやかに海の鳥

東京 芝 紫緑

吹き變る野分の雨戸あけて見る

青森 小林 緑雨

ハ、と笑へばこたまとなりて秋の山

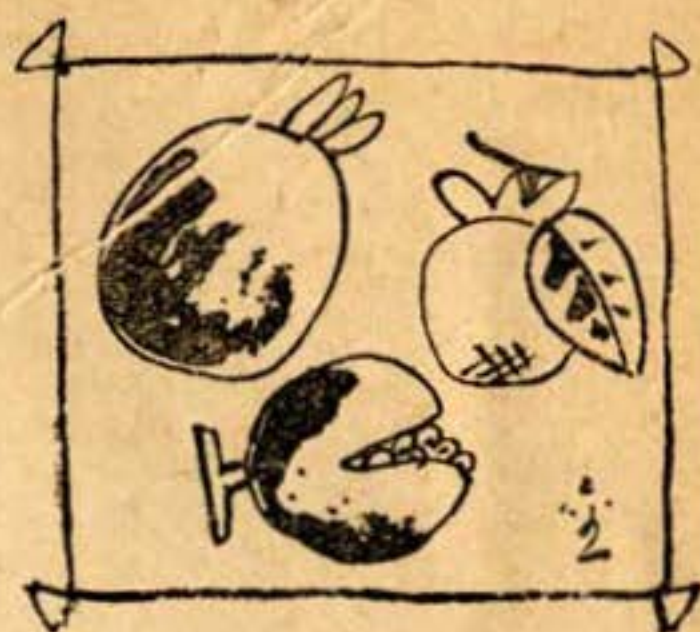
神奈川 金子 雅子

夕曉の空三角となりにけり

浄土俳壇を

復活しました

浄土俳壇を盛大にするべく努力してをりましたが、種々の都合で数ヶ月間休載いたしました。其の間、會員諸氏からの御投稿も多数ありましたが、遂に發表する機会を逸し、何とも申譯のない次第です。今回幸にも東都俳壇の中堅作家として知られた太田耳動子先生を煩はし當俳壇の御指導をお願いする事になりました。先生は「鹿火屋」「睦月」等により後人の指導に當られてをります。愛好の士はどし／＼御投稿下さい。浄土歌壇の方も盛大になつて來ました。當俳壇も今後先生の指導の下に大いに立派なものに育てたいと存じます。會員諸氏にはどし／＼御投稿下さい。御希望も御遠慮なくお申出下さい。

拜おが

む

(二)

— 信しん仰かうの覺おぼえ書がき —

藤井實應

常じやう不ふ輕きやう菩ぼ薩さつ

常不輕菩薩は一切の人々を禮拜せられました。

「我深く汝等を敬ふ、敢て輕慢せず、所以は何ん。汝等皆菩薩の道を行じて、當に作佛することを得べし。」

(法華經常不輕菩薩品)

「あなたはやがて佛になられる方だ」とどんな人に對しても禮拜せられたといふのであります。時に心よからぬ者があつて惡口をいひ罵り、或は杖や石を以て打擲などしたり致しました。すると一たん逃げてこれを見え遠くの方から大きな聲で「我敢て汝等を輕しめず、汝等皆當に作佛すべし」といつてまた禮拜せられるのであります。

一切の人々を輕んぜず、常に禮拜せられたので常不輕菩薩といはれたのであります。

これは法華經の中に説かれてあるのでありますが、どんな人をも禮拜することの出来る人は何と尊い方であられることとせう。一切の人々を拜むことの出来る人は、また一切の人々から拜まれる人であります。まことにこの常不輕菩薩はやがて佛となり、かつて惡罵し、杖や石で打つたりなどした者まで教化し得度せしめたまふたと説かれてあります。

現有大僧正

それについて思ひ出されますのは、昭和九年四月百三歳の高齡を以て遷化遊ばされた、前淨土宗管長山下現有大僧正のことであ

ります。

山下大僧正はどなたにお會ひなされても別にむつかしいことも變つたことも言はれなかつたとのことです。信者には淨土宗の安心について宗祖法然上人の一枚起請文の概略を述べられる位で、釋尊から宗祖法然上人へ傳はつたお念佛の法門をお勧めになり、「私はあなた方を濟度しやうなどいふやうな不遜な考は毛頭ございません。唯わたくしにはあなた方のお姿が如來さまに見えるのでお念佛をとなへて拜ましてもらふのです」

といつてお十念を授けられるのでした。

私も大正十年増上寺で加行といつて僧侶になる行を致しましたとき、大僧正から右のやうなお言葉をいただき、お十念をうけました。その時あまりの有難さに思はずひれふして泣いたことをいつまでも忘れ得ぬのであります。

人々が如來さまに見えて拜まずにはおれなかつたといふ山下大僧正は日々休む間もなく、お念佛を申しつけてをられるのでした。そして數百萬の信者からは、生きほとけさまとして拜まれた方でありました。

拜むことの有難さ

信仰の友として私の常に敬愛してゐる日といふ長野縣の人があ

ります。百貨店を経営して店員の方も三十餘名あります。今から七年ほど前から道に志し、突然の災厄にあふてから猛烈に念佛申すやうになり、今日まで數年間、近くにある檀那寺へ毎朝殆ど缺席なくお参りしてお念佛をとなへつけてをられます。四年ほど前から朝起念佛會をつくつて毎朝五時頃から約一時間ほどお念佛申すことになりました。はじめは御住職共に四名にすぎなかつたのですが今では十數名となり、毎早朝元氣のいゝお念佛がとなへつけられてゐるのであります。どんなに雨の降る日も、如何に厳しい寒さの日でも殆ど休むことなくつけられてゐます。

日さんは朝起きて、お寺へ詣りお念佛申すその前後の心もちを次のやうに話されました。

「朝眼がさめますと寢室の佛像へすぐ合掌します。次に妻と子供の寢顔へ合掌します。次に母の寢所へソツと入つて御無事の姿を有難く拜みます。男子店員達の寢てゐる所を合掌しつゝ店を出ます。潜戸を開いて表へ出る時、何十年の間、こゝを跨いで出入して下すつた幾十萬といふ人の足跡を合掌しつゝ拜んで出ます。表へ出て寺へゆくまでに、念佛の友人で病氣の爲今休んでゐる人の家の門口で、まだ寢てゐるであらう友を拜んでゆき過ぎます。寺へゆく間にいくつかの神社佛閣の前を拜んで通ります。その神社の前を自轉車に乗つてゐる人で、わざ／＼降りて禮拜してゆく人もあります。又製糸工場へ通ふ女工さんがキチンと立ちどまつて

神様へお辭儀してゐられるのをよく見受けます。私はその人達の後姿を有難く拜むのです。

拜む人は拜まれる人であり

拜まれる人は拜む人である

といふみ教を有難く思ひ出します。寺で拜みあつて家へ歸ると、店員や子供たちに出來るだけ私の方から先にお早うと朗に挨拶いたします。座敷に遊んでゐる子供のそばへ行つて、頭を疊にすりつけて私からお辭儀をする、お父さんに先にやられて子供も鄭重に頭をすりつけます。家庭を拜みあひの世界にしたいと願つてゐるのです。約五十分のお寺のお念佛ですつかり綺麗に洗ひ淨められる心地がします。

打ちたく鉦や木魚にわが思

皆打ちとけて念佛となる

朝起會同人Jさんのお歌の通りです。

悲しみもよろこびもまたさびしさも

南無阿彌陀佛に生かされてゆく。

先生のお歌が有難く味はれます。淨い念佛のありがたい朝を経て一日の活動が開始されるのです。信仰の有難さ、念佛のありがたいさ！

みほとけのすくひにあひしその日より

おのれ一人のいのちならなく

數年前につくつた私の歌です。

そして一年毎に、一日ましに、み佛の有難さを味はせていたゞける此身の幸福を痛感いたします。斯くならしめていたゞいた一切の因縁に心から感謝せざるを得ぬのです。南無阿彌陀佛、々々々々々々……

拜むことの出來るまで

妻を拜み、子を拜み、母を拜み、店員を拜み、お客さまの足跡を拜み、友を拜み、拜む人を拜む、拜みに拜むJさんは何といふ尊い、またしあはせな方であらうかと常に尊敬してゐるのであります。

しかしながら今日のめぐまれたJさんになられるまでの苦心努力をみのがしてはならぬと存じます。すでに七年間毎朝お念佛をつづけられたといふ一事をもつてしても實に容易ならぬことです。ります。Jさんもはじめから拜むことが出來たものではありませんでした。手をあはせることがきまりわるく思ひ、念佛申すことがはづかしいことだと思はれてゐた時もあつたであります。それどころではない、そうした佛縁に近づくどころか、むしろそうしたことを輕蔑してゐた時もあつたとのことです。そうして誘はるゝがまゝに花柳の巷にも通つた暗い生活のときもありました。し

かし佛縁にめぐまれて、椎尾博士の「人間の宗教」を讀むことを一因縁として、驕然として今迄の非をさと、佛道に志し眞實に生きゆかんと、の念願を起されたのでありました。折も折、Hさんの身の上には、泣くにも泣けぬ悲惨事——一大試練——がふりかゝつたのです。

Hさんはその當時を思ひ出される毎に、お顔に、涙が光るのです。

Hさんは今日の身を省み、過去を偲んで語られるのです。(以下Hさんの手記)

× × ×
妻子が逝いて七年、朝起會の同行と勤行を了へてから、その奥津城に線香を手向くる時、朝毎に思ひ出は新しく蘇る。

眞生院光譽不滅妙照大姉

圖 芳 善 童 女

墓前に十念を捧げる時、思ひ出の繪巻はサット一瞬にひろがる。静かに眼をつむると妻の 倅が見える。

嫁入當時の丸鬚初々しい姿。

おちついて來た晩年の妻の顔。

悠長な農家から嫁いできて、なれない商家の多忙さに泣かされた妻。

初め算盤が思ふように出來なくて心で泣いてゐた可哀相な妻。

里歸りした時、妹達はさうした處へ縁づけるなと父母にいつたといふ妻。

夫が花柳の巷へ足繁く通つても一言半句も不平を云はなかつた妻。

平凡だつたが静かで貞淑一方だつた妻。

嫁いで七時半、年毎に家と店に馴染んで不平なく、よく働いてくれた妻。

母の乳はなれて我を笑み迎ふ

湯治十日をあはざりし吾子

その死の半年前に私に此の歌を日記へ書かした三歳の女兒。

眞夜中の零時半、驚いて眼を醒ました時は出口の階段迄一ぱいの猛火、逃げるに逃られず太い鐵格子の前に腰を抜かして此三歳の女兒をかき抱いたまゝ、五六ヶ月の胎兒と共に逝いた妻。

夫が居てくれたならと考へつゝ、噫どうしよう／＼と一室の中を遁げ惑ひ、表側の鐵格子から助けて助けてと泣き喚んだであらう妻。

三十一歳の若さで無惨の死を遂げた妻。

其死を聞いてワツと泣き崩れたといふ近所のおかみさんや、又

知ると知らざるすべての人の同情をひいた妻。

生き残つた私は、妻へ集る同情に引替へて世間の非常なる惡罵

を浴びた。

彼奴が妾を圍つたから妻が放火自殺したとの評判、妾宅へ行つてゐた爲彼奴は運よく命拾ひをしたといふ話、花柳街〇〇家から火事と聞いて飛び出して行つた彼奴の後姿を既に見たといふ人の吹聴、女事務員と彼奴との醜關係等、噂は噂を生んで、悪口新聞に連日叩かれた。

こんなことなら、彼の時一層一思に妻子と焼け死んだ方がよかつたと、私は友人の家で泣いた。あの日、妻と最後に話した言葉は何であつたかと、どう考へても思ひ出せぬ。

七年半連れ添ふた二人が一言も交えず永別するとは何と縁の薄かつたことか。

思へば何たる不可思議のことか、あの晩に限つて七歳の長女が「父さんあちらで寝よう」といふまゝに長女と共に別室に行つて寝たことが、この火事にお前たちを死なせ、私らだけ死を免れる一因となつたであらうとは。

納棺の際、最後の告別をせよと云はれたけれども、惨らしい死顔がどうして見られやうか。又七歳の長女にも悲しい思ひ出を幼い頭に残させまいと思つて、私は娘を背負つて隣室へ隠れた。そして棺側に泣く人々の聲に泣かされた。

棺を打つ釘の音を淋しく聞いてゐた。妻子の死顔を一目も見ずに別れたのだ——妻よ、私を嘸怨んだことだらう、しかし、最も愛すればこそお前を視るに忍びなかつたのだ。

今迄長くして分けてゐた頭髮を、店員にバリカンで刈つて貰ひ手際悪い丸坊主になつて、にわか道心の心持ちで寺に泊つて朝夕お前にお詫びと回向の念佛をしてゐたのだ。

しかしお前は無駄に死んでは呉れなかつた。生き残つた私に大きな義務あることゝ、生くべきまことの道を教へてくれたのだ。私を佛道に導いてくれたのはお前なのだ。

お前が死ぬと里の両親は義絶を申し込んで來た。藝者買に行つてゐて妻子丈け死なせた不届者めと立腹された。お前の兄がカン／＼に憤つて來た。私が如何に辯解しても分つて呉れぬ。火事の初めから私と共に消火に盡力した店員を證人にしても納得して呉れない。料理屋から飛び出す後姿を見た證人があるからいくら辯解しても駄目だといふ。

私は四十日前、寺で書いた更生記念の懺悔録が、お前の筆筒の中で焼け残つてゐたのに氣がついて、是を兄に渡し「家へ歸つてゆつくり讀んで下さい。是で御諒解願へなければ私の方から二度とお宅へは上りません」と言つて別れた。

嬉しいことには、その懺悔録によつて、交際を許されて、その上ならずお前の妹を貰つたのだ。

長男は正しき人になれと正人をつけ、次男は椎尾先生に忠男とつけて頂き、昨年法然上人と日を同じうして生れた女兒には、藤井先生が念佛がおひろがり下さるやうにとひろ子と命名して下さ

れた。

私は今非常に幸福に暮らせていたゞいてゐる。今のやうな氣もちでお前と一年でも、一月でも、一日でも暮してみたかつたと思ふ。私は随分お前を慮げた、しかしあれから毎朝お前のことを思はぬことはない。サンゲしてゐるのだ。お前の前で合掌念佛してゐて涙の出る朝はうれしい、お前にあへるやうな氣がする。——實に念佛こそはお前の最も有意義な回向であり、又私をも生かして下さる最大のお力なのだ。南無阿彌陀佛！

×

×

×

實に涙なくしては讀めぬことです、今日、心の底から感謝をさしげ、周囲の人を拜まれるやうになるまでには、かやうな涙に綴られた過去の數々がふくまれてゐるのであります。全く自らの弱さに氣づき、自らの愚惡にさめる時に、心の底から拜めるやうになるものと思はれます。それにつけても春風秋雨七ヶ年の不斷の勇猛な念佛が、かやうに且さんを育てたまふたのであります。

念佛の不斷の相續！法然上人の「只一向に念佛すべし」の御教をしみじくありがたく味はせていたゞくのであります、同時にこの教にしたがうて、且さんの如く、ほんとうに拜むことの出来る幸な身の上にならせてもらひたいものと念願するものであります。(了)

高級布教 好評嘖々たる!!

請話 一枚起請文

中村 辨康著 (四六判七二頁總ふりがな付)

淨土宗の念佛信仰とは？この根本思想が「一枚起請文」の中に最も優れた形で現はされてゐる。人は既に何人も知るところです。然もそれを現代人に納得の行くやうに懇切に説いたのがこの書です。誰れにも解るやうに色々な例をとつて説いてありますから、布教用書としては絶好のものとして、多部數の注文が殺到するのは當然です。年末年始の信徒への賜り物として何物にも勝る價值があります。

多部數購入
の方に特典

一部十錢(送料二錢)の所、一時に十部以上御注文の向には一部當り九錢、送料不要の特典が設けてあります

◎發行所 法然上人鑽仰會

振替東京八二一八七番

『淨土』新年號豫告!!

第三年の飛躍のために着々準備なる

新年號は發潮たる裝を凝らして世に出さんものと、目下着々準備中であります。執筆者顔振にも内容にも新鮮な時代の感じを取入れ、第三年を期して更に一段の飛躍を心掛けております。何卒御聲援の程御願申します。

鑽仰運動ニユース

盛會を極めた

勝浦支部の發會式

千葉外房方面は日蓮上人の生誕地で、念佛信仰は全く不振の地であるが、ここに孤獨三十年、大法の宣布に精進してゐられる大日



方大忍氏の努力によつて、勝浦覺翁寺支部の鑽仰會發會式が十一月十三日十四日の兩日盛大に舉行された。會員既に四十、參會者は兩日とも約百名の盛會であつた。

本部からは栗本俊道、佐藤賢

支部總會に意氣壯ん

日詰支部の活躍

過般盛大な發會式を舉げた岩手郡の日詰支部(主任岩瀬吉雄氏)では、其後着々と支部擴大に努力中であつたが、今般、巡教使勝又俊洞師を迎へて、十一月十五日午後六時より壯んな支部總

順の兩氏出講して、十三日は午後七時から一會の回顧に引續いて栗本氏は「法然上人と青年運動」を講じ、念佛信仰が青年の間に行はれねばならぬ所以を力説し佐藤氏は「法然上人鑽仰會の使命」を詳述した。

翌十四日は佐藤氏が二時間に涉つて「現代の文化と法然上人」を講じ、法然上人の信仰が現代文化の指導的地位にあらねばならぬ所以を、親切に縷説した。晩秋の夜に相應しいしつとりとした有意義な會であつた。

(寫眞は覺翁寺支部)

會を來迎寺で迎へた。會員全參集の下に敬虔な法要を勤修し、續いて勝又師の熱烈な法話を聴聞した。尙、當日は本部より惠送された「淨土」を末入會の人達に配布して、大いに入會勧誘に努めた

會員の聲

▼念佛讀本は實に創刊以來の大功、雜誌「淨土」存在の意義はこれで始めて徹底すと稱すべきものである。通俗と云ふ事は超世の生活人の(勿論學者等も)大衆への幻惑である。俗衆は俗物に飽きてゐるのです。されば宗教に趣向するので、第二念佛讀本をまた正月號に要求する讀者である。(東京・樹下空法)

▼宗教の醜狀頭々として一法の哀愁憤激をさへ覺えしめる中に、鑽仰會本部諸氏の獻身的護法の御努力は涙ぐましく迄に、我々地方教團を護る者にとつては有難く、ひたすら感謝に堪えぬ次第であります。法の爲に御身大切に本部員の皆様が過進あらん事を切に合掌希念申し上げます。(釧路市・藤井正亮)

▼法然上人鑽仰の一助として、念佛生活の不求自得の現益方面の體驗談を、有象無象、出家在家五十名か百名かに依頼し、往復はがきにも應答を求め、「淨土」の機頁かを割かれ、對機宣傳をしては如何かと、時節柄、痛感いたします。偉い方々の論説のみでは、大衆の興味をそゝる可能性がそがれると存じます。殊に萬機普益の選擇本願念佛、天衣無縫(眞野先生の所謂)の法然上人の眞に偉大なる御聖格を中外に御宣揚の目的に出發した鑽仰會の淨業より見て、尙更……と存じます。苦言多謝。(東京・竹中生)

▼十一月號を手に入れました時は、何時ものと感じが大變違ひましたので、少しもごつきましたが、内容を拜見して行くうち、次第に興味が湧いて参りました。有難く涙がこぼれるやうな氣がいたしました。今後何時かは「念佛讀本」のやうなものを出して戴ければ、私たちに本當に良い手引になります。(山口・川瀨みな子)

北海に揚る法幢

大成寺支部發會式

北海道釧路市の大成寺では住職藤井正亮氏が主任となり四十餘名の會員を獲得して、大成寺支部を結成してゐたが、去る十月十四日午後六時より、十夜會の好機をとじて、盛大なる支部發會式を舉行した。百餘名の同行が本堂に密集し、莊嚴なる式次の下に會を

進めたが、本部より直送せる總裁岩井親下の祝辭が朗讀せられるや、法悦はその極に達した。式後、森脇孝之師の「法然上人の宗教」の講話を聞いたが、森脇氏の熱舌は聴衆に深い感銘を與へ、上人への熱烈な思慕の念を高めさせた。

各地支部の活動

鹿兒島支部

當支部は眞劍な支部例會によつて不斷の發展を遂げつゝあるが去る十月の七、八、九日の三日間、不斷光院に於て別時念佛修養會を開催した。莊重な勤行と、支部主任小橋麟瑞氏の「忍激上人別時八誓に就いて」の講話とにより、多大の感動を與へた。例會毎に

固まつて行く當支部の地盤は既に強固なものがある。

正念寺支部

東京駒込の正念寺支部では十月二十三日午後一時より本部より辻重光氏を迎へて、支部例會を開いた。熱講と熱聴に時の過ぎるのも忘れて、薄暮五時過ぎに散會した。

婦人の入信式

岩手縣花巻町松庵寺では、十一月五日巡教使勝又俊洞氏を迎へて、法然上人の信仰による女子青年の入信式を舉げた。十八名の入信者を得て、非常な法悦にひたつた。

長春寺支部

滿洲國の首府新京の當支部では、十月十四日午後七時より鑽仰會座談會と銘打つて、支部例會を開いた。主任伊藤芝信氏を中心として眞劍な信仰座談會に花を咲かせた。

廣隆寺支部

會員二十五名を有する岩手縣花巻町の當支部(主任谷地益雄氏)では、十一月六日午前十時より支部發會式を舉行したが、巡教使勝又俊洞氏の講演と相待つて、非常な盛況を呈した。今後の飛躍は期して待つべきものがある。

支部發表表

第十六回

445	保元寺支部	東京市淺草區橋場町	里見達雄氏外十五名
446	西福寺支部	富山縣高岡市千木屋町	泉龍堂氏外八名
447	正覺寺支部	岩手縣氣仙郡竹駒村	岩崎法城氏外六名
448	專念寺支部	山口縣玖波郡川下村	吉田武善氏外五名
449	光明寺支部	福井縣小浜町	瓜生天全氏外五名
450	淨願寺支部	高松市五番町	上野忠雄氏外六名
451	長春寺支部	滿洲國新京市曙町四	伊藤芝信氏外六十九名
452	西林寺支部	大阪府泉南郡湊輪村	大崎達道氏外十一名
453	天陽院支部	東京市芝區公園地	笠原秀定氏外五名
454	念佛院支部	“	淺草區石濱町一ノ七
455	大多喜支部	千葉縣大多喜町新町	中野隆元氏外七名
456	常福寺支部	茨城縣那珂郡瓜連町	大久保竹治郎氏外八名
457	金浦支部	秋田縣由利郡金浦町淨光寺	本間泰勝氏外二十三名
458	正念寺支部	山形縣最上郡戸澤村	鹽野八丁氏外四名
459	光明寺支部	福島縣郡山郡照會村	齋藤泰應氏外六名
460	專光寺支部	“	田村郡小野新町館廻
461	極樂寺支部	富山縣高岡市坂下町	内山藤芳氏外七名
462	新源光寺支部	函館市春日町四三	英泰氏外五名
463	眞光寺支部	長野縣東筑摩郡和田村	宮下聖隆氏外六名
464	圓福寺支部	奈良縣高市郡新深村川西	平野隆盛氏外五名

編輯後記

◇十一月號特輯『念佛讀本』は非常な好評で、布教用書として多部数申込殺倒して本部は轉手子舞ひしております。正教宣揚のために本部員一同大喜びいたしております。唯、校正の不注意のため、誤植が相當多いやうで、殊に第九十五頁の「念佛の意義、推尾辨康」とありますのは、辨匡の誤植で、目次中、「櫻坊徳本、中野英善」とありますのは善英の誤植でありまして、推尾師、中野師並びに讀者に對して、この際心からおわび申上ります。御訂正の程御願申上ります。

◇本月號には實話を多くとり入れました。實際生活に於ける信仰心の具體的な現れを見ることは力強い信仰心の鼓舞となると信じるからであります。

◇隨筆の藤秀環氏は眞宗本派

微應寺法主、廣島文理大學講師であります。雜誌「莊嚴」を主裁しておられます。宗教論壇の雄。

生田花世女史は生田春月氏の未亡人で、女流作家として既に名を成しておる方、共に好個の隨筆と存じます。

◇中村辨康氏の長らく連載いたしました「法語抄講義、あふひ草」は前回を以つて終了いたしましたので、講義ものは今月一回休みまして、來月からは大正大學教授で本誌ともおなじみの大野法道氏が聖典講義を續ける豫定、中村辨康師

は他の項目を受持たれて健筆を振はれる筈です。

◇その他、目下編輯部に於て計畫中のものも澤山御座いますが、本誌は會員全體のものでありますから、編輯、内容等にて御氣付きのことが御座いましたら、御遠慮なく、どしどし御申込み下さいませう。出来るだけ御希望を取り入れ、質的にも量的にもどしどし向上させて行き度く存じております。會員全體の編輯によつて始めて本誌の眞面目が發揮し得るものと信じております。

◇佛典說話全集

全十三冊揃

窪川 拾五圓

◇國譯一切經

全百五十五冊揃

窪川 百拾圓

古本宗教書籍目錄

最書近古時報

御入用の方は各冊とも送料二錢づゝ、御送附を乞ふ。

電話小石川三七七〇番
振替 東京五七三七番東京市小石川區白山前町
窪川書店

浄土 十二月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可
昭和十二年十二月十日印刷納本
昭和十二年十二月一日發行

(定價金十錢)

編輯兼 眞野 正順
發行人 赤尾 光雄
印刷所 大日本印刷株式會社
發行所 法然上人續仰會
東京市芝區芝公園明照會館内
振替 東京八二一八七番

「浄土」購讀規定

一部 定價 金十錢

(送料一錢)

一ケ年 金一圓

(送料不要)

右の一ケ年金壹圓は法然上人續仰會の會費です。入會申込みと同時に一圓御納めになれば、「浄土」が一ケ年間購讀できます。その他種々な特典が得られます。

新刊

中里介山著

法然上人傳

三六版二五〇頁
九ボラルビ付
美麗クロース装
定價 六十四錢
送料共

法然上人を知ること、これは日本人として最大の常識である！

著者の言葉から
法然上人傳の權威は何んと云つても「勅修御傳」である。「勅修御傳」即ち「法然上人行狀繪圖」は伏見天皇、後伏見天皇、後二條天皇の三帝が法然の遺徳を深く敬信なされてゐたが、その時分は異教の手あひが争ひ起つて妄りに法然の傳記を作るに至つたので、正統の深くこれを憂ひ、天子にも御心を惱ませられた結果、後伏見上皇の勅により叡山功德院の舜昌法師が近代杜撰の著作を捨て、信用すべき實録をとつて收め、(中略)十四年を経てこの行を了へたものである。(中略)それ等を要譯してこの雅文の典籍を比較的安易に讀ましむることは現代人に對する一つの親切であると思ひて、敢てこれを爲して本書を作つた僭越の罪を許されたい。

古文豪の通俗化！

發賣所

法然上人鑽仰會

芝區芝公園十五號地
振替東京八二一八七

◇ 隣人の友社 發行所 ◇

講話

淨土信仰の眞髓は實にこの一文に盡く！

日本信仰史上に燦然と輝く法然上人の『一枚起請文』。この一文の中に籠る信仰の精神を知らずして、信仰の何んたるかを語るは潜越である。この簡潔流麗なる語句の中に脈うつ深く豊かな宗教の眞理が當代隨一の名講義によつて、解り易く讀者の心に滲込んで行く！

宗教講話に新生面を開いた名講義！

新刊

!! 來出

布教用書の
最高峰

枚

起

請

文

發行所

法然上人鑽仰會

振替……東京八二二八七

定價 拾二錢
送料 共

本會は特に淨土信仰普及のため左の如き犠牲的奉仕をなす

一度に十部以上
購入されるれば 一部當り 九錢 (送料不要)

寺院の布教用、工場會社等の修養讀物として、最適！

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)
昭和十一年十二月廿日印刷納本 昭和十一年十二月一日發行

淨土 第二卷 第十二號

定價金十錢 (送料一錢)